

# 文部時報

第五百五十九號 目次

卷頭 (格言四則).....

日本近世史授業の必要.....

維新史料編纂會

藤井甚太郎.....二

江戸時代の學校建築に就て(一).....

名古屋高等工業學校助教

城戸久.....六

「專檢」に就て.....

文部省普通學務局

伊藤龜吉.....二四

昭和九年度學校給食施設に關する調査の概要.....

文部大臣官房體育課.....三六

昭和十年度文部省視學委員復命書抄

復命書

數學.....

文部省視學委員廣島高等學校教授

山崎喜重郎.....四三

## 文部省直轄學校の特色

□廣島高等學校概況.....

廣島高等學校校長

岡上梁.....四八

□本校の特色.....

熊本藥學專門學校校長

村山義溫.....五〇

## 農山漁村に於ける學校の實際

沈滞の農漁村に於ける更生教育の實際.....

大分縣香々地高等小學校長  
町青年學校校長

木村幸助.....五四

告示.....

文部省告示第二百九十九號(昭和高等商業學校ヲ高等學校高等科同以上ト指定)・同第三百號(三山珠算簿記學校名稱變更認可)・同第三百一號(上海居留民團立日本實業學校廢止認可)・同第三百二號(競進社實業學校設立者變更認可)・同第三百三號(昭和十一年文部省美術展覽會規則)・同第三百四號(長野縣諏訪第二高等女學校改稱認可)・同第三百五號(日本獸醫學校設置變更認可)・同第三百六號(國寶所有者變更).....

敘任及辭令(自昭和十一年八月一日至同十月日公表ノ分等).....

彙報.....

京都帝國大學講師異動——實業學校校長認可——第六十四回師範學校中學校高等女學校教員檢定本試驗合格者——同上試驗問題——教員免許狀失效——檢定教科用圖書——推薦映畫.....

## 文教問答

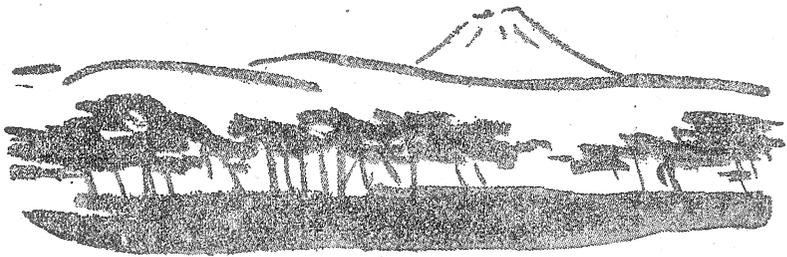
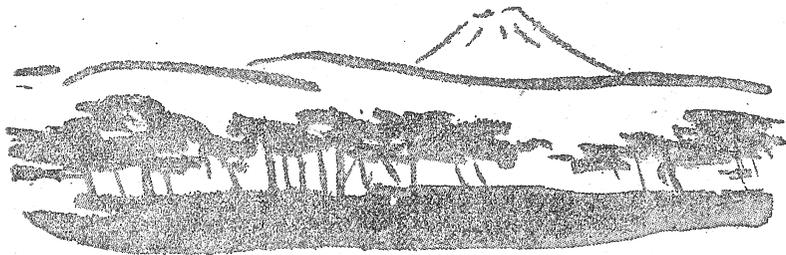
昭和九年度文部統計摘要(四).....

八九

統計

昭和十一年度地方費豫算(四).....

九六



# 江戸時代の學校建築に就て (一)

名古屋高等工業學校助教 城 戸 久

## 第一章 緒 論

我が國今日の教育は明治初年以來西洋の學制や教育方法に依つたもので、學校建築も教育内容に適應すべく西洋の影響を多大に受けた。然し仔細に考究して見れば我が國學校建築は明治初年に初まつたものでない。その淵源は古く寧樂平安の昔より、鎌倉室町に至つて勸學院文章院或ひは國學府學となり、又足利學校(一)金澤文庫(二)等相等特殊の建築も興つた。下つて天文年間渡來の天主教は Seminar, Collegium の如き完備せる學校建築を持つた。江戸時代に入つては急激に發展し、初期に於ては幕府の儒學獎勵と後期に於ける社會狀勢の變移は自ら武家民衆の教化建築の必要を生ぜしめ、我が國國民文化の興隆期とも呼ばるゝ時代を現出した。従つて今日發達せる學校建築の精神中樞は實に江戸時代にその根源を置くものと考えねばならぬ。

當代に於ける學校建築の發展を考究することに依り、幾分なりともかゝる意義に於ける江戸建築史の完成に近づくこともあらうと信ずる。

家康の向學と歴代將軍の儒學の獎勵はその當初に於ては封建制度の確立の爲に、儒教の理想たる治國平天下を政治の眼目とした結果であつたが、以後封建制の完備と共に學問の獎勵は諸藩諸學者に依り本質的となり、元祿の頃には天下泰平と相俟つて諸種の學派も生じ、やがては國學の興隆となつた。長崎を通じて行はれた貿易はつひに洋學の輸入を來し、更に後期に入つて國學の隆盛と社會の進歩は初期に於ける儒學獎勵の目的とやゝ離れて時代の進展に相應じ、幕府諸藩の手に依り各種學校の建築されること年と共にその數を増した。さればかゝる内容の變革に依つて必然その建築形式の上にも種々の變革發展を來さねばならなかつた。

更に従來江戸建築史上の一特質として儒教建築の名の下に擧げられて來た、湯島聖堂の創始は此等諸藩學校の模範となつたものであるが、聖堂建築の大部分は請種の學校建築と同時に建築されて來たもので、殊に比較的時代の古い岡山藩學校に於ける聖堂建築を見なかつた點よりも、これを單に孔子を祀る廟といふ狹義に於て價值づけ、單獨に採り擧げるべきでない。建築

江戸時代の學校建築に就て

江戸時代はその初期に於ては封建制度の完備に依り幕府の基礎は益々強固となり、爲に靈廟の如き特殊壯麗な建築を興し、美術工藝の方面に異常の發展をうながした。然るに社會制度の完備は工匠技術の世襲となり、建築的には構造意匠共に沈滞し日本建築史上の暗黒時代とも言はるゝ時代であつた。後元祿享保の封建爛熟時代を経て泰平の長くつゞくや武家存續の意義やうやく消滅すると共に交通の進歩、農工の進展は必然的に商品貨幣經濟の發達となり、新に町人の勃興となつた。従つて後期に於ける建築の發展は商家その他民衆建築として寧ろこの新興勢力に依るところ多く、やがて明治以降の我が國産業建築發展の根幹をなした。

然しかくの如き江戸封建社會の完備より崩壞に至る社會狀勢の變移と必然的に併行した建築の變遷を内容的に検討した建築史の大系は遺憾ながら未だ完成されては居ない。従つて少くも史上の儒教建築は湯島大成殿を骨子として當時沈滞せる建築界に異常である支那様式を採り入れたものとして重視されては居るが、廣く全般より觀るときその様式的特異性も今一步検討する必要があるやうに思ふ。寧ろこれは何れの點よりも江戸時代學校建築の發達といふ大なる問題に包含されて考究するべきであらう。

著者は昭和五年以來少しく本問題に興味を感じて居つたが、昭和九年八月、同十年一月の中國、九州、東北地方の踏査に依り、直接材料蒐集の結果益々その信念を強めることを得た。従つて茲に未だ不完全であるが敢て淺學を顧みず、江戸時代學校建築の發展に就て私見を述べんとする處である。なほ本論文に於ては官學私學寺子屋の建築に就ては更に將來の研究に俟つこととし概説するに留め、主として現存遺構を有する藩學郷學校に就て論述を進めた。幾多諸先學識者の御教辭を乞ひ得るならば幸ひである。又本研究に多大の御指導を賜つた本校々長土屋純一先生に厚く御禮申上げる。

## 第二章 江戸時代に於ける學校建築の發展

### 第一節 官學校

官學校とは幕府の手に依り建設せられた學校であるが、その

當初は何れも民間の一人に依り建設せられた。湯島の聖堂も家光が林羅山に寛永七年上野忍岡の地を興へ書院を建てしめ、同九年尾張藩祖義直が孔子廟を建てたに初まる。寛文三年家綱が弘文館の名稱を興へ、元祿三年には綱吉が神田湯島の地に移し、地を昌平と命名した。建築は松平右京輝貞を普請奉行、蜂須賀隆重に工役を助けしめ、大工棟梁依田伯耆が頭で翌四年落成した。大成殿は間口五間五尺奥行三七五尺高さ四三三三尺の入母屋造銅瓦葺で雲科栱を用ひ、黒漆を施し異色を帯びた壯麗な建築であつた。然しその平面は未だ支那文廟とは遠きところ多大にあつたやうに考へられる。大成殿の左右の建物が東西兩廡で各間口三間奥行一九五尺、この三殿の南方に杏壇門、左右が東西廊、南に入徳門仰高門が建ち、學校施設としては東舎(學舎)西舎(看守所)講堂書庫祭器庫があつた。かく元祿三年には林氏の私塾が湯島に移轉せられ、學校として内容外觀共に整備したと見られるが、實は建築物の構造を幕府が行つたのみで未だ幕府の事業として教育の法制化せられたものではなかつた。然るにこの聖堂は元祿十六年明和九年天明六年の三度の火災に會ひ昌平校は頗る衰頹した。(五)

後松平定信老中となるに及び力を儒學の復興に盡し、寛政二年柴野栗山の議に依り異學を禁じ、學糧を増し同四年學舎を改

あり、且又定信施政の後で幕府財政の餘裕もあり、純然たる官學校として規模頗る大きく聖堂の様式も明人朱舜水の作つた聖廟の模型を參考とし従來の制を破り支那文廟にならつた平面を用ひた。大成殿は南向、東西二間南北四七九尺高四八・四尺屋根は銅瓦葺、棟の兩端に蚩吻を載せ、黒漆を施し大に支那風の發輝に努めた。學校施設として聽堂(御座敷)講堂(稽古所)學舎(寮)教官住宅が建築せられ幕臣の子弟の教育が茲で行はれた。その後昌平校は幕末になり洋學の研究が次第に高調せられるに到つてやうやく衰へ初めた。

その他に官學校として寛政五年増保己一の願に依る和學講談所、明和二年奥醫師多祀安元に依る醫學館等が設立された。昌平校と同じく最初は一私人の經營にまかせられ、如何なる建築であつたかが明かでないが、少くも後幕府の官學校となつたものなれば、その内容に應じ特異の平面を持つたものと考へられる。又地方に於ける幕府の直轄の地に於ても諸藩の官學校が設立せられた。儒學に於ける長崎の明倫堂は古く正保四年向井元升の立山書院の創立に初まり、寛政年間には甲府學問所等第一表に示す如く時代の下るに従ひ洋學輸入に刺戟せられ、諸種の官學校が江戸及地方に建築された。中んづく長崎明倫堂は現在長崎市伊勢町に聖堂の餘影に残して居る。

江戸時代の學校建築に就て

第一表 江戸時代官學校設立一覽表

校名	設立地	設立年代
昌平坂學問所	江戸	寛永七年
湯島聖堂	江戸	元祿三年
和學講談所	江戸	寛政五年
醫學館	江戸	寛政三年
開成所	江戸	文政八年
醫學所	江戸	文政二年
講武所	江戸	文政四年
明倫堂	長崎	正保四年
徽典館	甲府	寛政四年
修敬館	佐渡	文政七年
溫敬堂	伊勢	文政四年
日光學問所	下野	弘化四年
精得館	長崎	文政二年
濟美館	長崎	文政三年
修文館	横濱	文政九年

築して規模を大にした。定信は寛政五年引退、同九年幕府は定信の政策を受け聖堂の擴張を圖り、従來半官半私であつたのを純然たる官學に改め、同十年平内大隅政休が頭梁となり建築を興し同十二年に竣功した。この時の昌平校は異學の禁の直後で

第二節 藩學校

幕府に依て幕臣を養成すると同時に各藩に於ても藩士の爲に學校を興し儒學を主とし武藝を加へた。諸藩學校中その起原の最古のものは尾張明倫堂である。創立年代は不明であるが、藩祖義直時代に孔子堂を設け、寛延元年明倫堂と稱し天明二年には新に建築を興し純然たる藩學の制を確立した。次で盛岡藩作人館、岡山藩花島教場等寛永年間設立で自來諸藩に於ける藩學校の設立校數江戸時代に屬するもの二三校の多數に及んだ。第二表。

第二表 江戸時代藩學校設立一覽表

校名	設立年代	校名	設立年代
明倫堂	好古堂	路元	祿四年
作人館	士館	田	七年
花島教場	芝館	村	九年
立教館	米館	澤	十年
日新館	讓館	瀬	十二年
學新會	誠意館	山	十五年
五教館	道館	松	十五年
弘文館	高館	山	元祿年間
小學校	龜館	原	同
	鹿館	村	同
	嚴館	上	上



尚友館	奧	安政年間	日新館	原元治元年
崇文館	宮同	上達	道館	田同
日新堂	島同	上藩	立學校	田同
明新館	萬延元年	觀光	館佐	野同
進德館	遠同	上樹	德館	上
正徳館	板同	上道	學館	田
山口明倫館	口同	上修	道館	田
學習館	岡文久二年	明允	館高	浦
致道館	知	二年	六	四年

註 本表は主として石川謙著「日本庶民教育史」所載のものより著者の作製せしもので、總數二二七校ある。  
日本教育史資料(一〇)に依るものと四校多きは岡山藩の如く後改稱せしものを二校として挙げ、又江戸藩邸内にあるものを數へたものある爲である。

設立校數と時代との關係を圖示すれば第一圖の如くなる。此れに依つて藩學校設立の顯著に現はれたのは寛永寛文中心時代、元祿中心時代、安永天明中心時代、文化文政中心時代(二)で何れも江戸全期を通じて最も特異の發展をなした時代であることが知られる。寛永寛文時代は封建の基礎未だ定まらず、政治の根本を治國平天下にあるとし、その精神は學問に依り得られ、學校の經營が諸政の根本であるとの主旨の下に藩學校の設立が企てられた(一)。元祿時代は既に百年に渉る永い泰平に依

第三表 江戸時代郷學校設立一覽表(城戸)

校名	設立地	設立年代	校名	設立地	設立年代
閉谷學校	前閉谷	寛文六年	鄉學	校甲斐西野	天保六年
習學	所備前香登	天和年間	倫	堂攝津伊丹	天保九年
・多久學校	肥前多久	元祿十二年	導	所肥前伊賀	天保十年
含翠堂	攝津原野	享保二年	諭	場美作津山	天保十二年
三近堂	肥前堤	享保年間	讓	館甲斐谷村	天保十三年
時習館	尾張名古屋	天明年間	業	館常陸	天保年間
習學	所加賀小松	寛政六年	習	館常陸太田	天保年間
典學	館美作久世	寛政七年	習	館常陸大久保	天保年間
敬業館	備中笠岡	寛政十年	習	館常陸野口	天保年間
遷善館	武藏久喜	享利文化頃	雅	館常陸太子	天保年間
故學堂	周防大河内	享和元年	雅	校常陸岩村	天保年間
郷學	校常陸延方	文化五年	倫	館備中倉敷	天保年間
上田學	舍肥前上田	文化九年	倫	館備中西原	嘉永六年
笹原學	舍肥前笹原	文化九年	讓	館日向佐原	嘉永六年
五惇堂	上野伊興久	文化年間	學	校日向佐原	嘉永六年
綱義堂	上野伊勢崎	文化年間	學	校備中八田	嘉永年間
遜新堂	同上	文化年間	學	校上野安中	嘉永年間
正誼堂	同上	文化年間	學	校上野五料	安政二年
會輔堂	同上	文化年間	諭	所備中松山	安政二年
由學館	館甲斐石和	文政七年	諭	校越前栗田部	安政四年

江戸時代の學校建築に就て

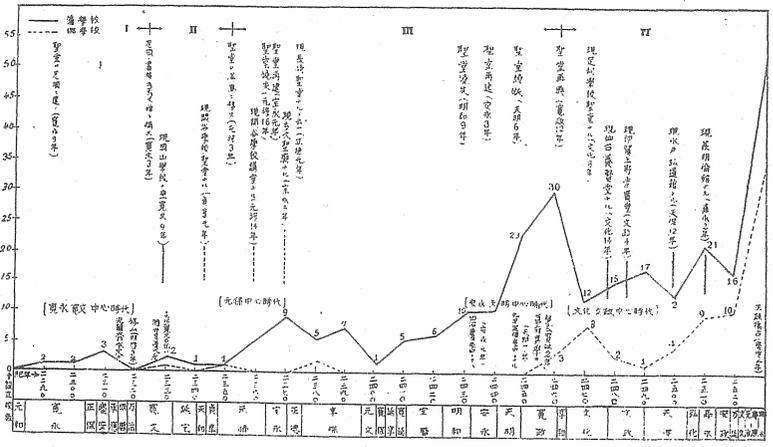
り都市の勃興と農村の疲憊とを招き町人の勢力が無制限に向上し所謂元祿文化を現出したが、幕府の財政は窮乏を重ねて封建制度の基本組織は内部から次第に腐蝕されて来た時代である。吉宗は財政と治教に努力したのは當然のことと國政の手段として教育國策に資するための學問が奨励(三)せられ、諸藩に依り建設せられた藩學校は茲に一段と數を増した。享保より時の流れと共に更にその數が擴つて行つたが、安永天明に至つてその頂點に達した。天明より享和の約二〇年間にその數五八の藩學校が設立されて居る。これは松平定信の學問奨励と湯島聖堂の復興に俟つ所大であつた。次の文化文政時代は定信奨學の餘風と未曾有の文化爛熟期と又西洋文明の影響を受けて我が國學校建設史上特筆すべき時代であつた。

江戸時代藩學校の設立は四時代を劃して益々進展したが、その設立の主旨も時代を経るに従ひ變じ、諸藩の社會狀況と經濟狀態に依りその規模も自ら相違した。建築施設としては何れも講堂又は書院を主たる就學の場所となし、他に學舍聖堂御座所御成門教官宿舍及び附屬建物が整然と一劃にあつたが、その多くは明治以來改廢せられた現存のものは第三章に記述する如く甚だ僅少である。

第三節 郷學校

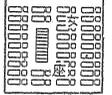
郷	校名	設立地	設立年代	校名	設立地	設立年代
郷	校越前松岡	安政四年	郷	校攝津志手原	慶應三年	
修文	館伊勢津	安政五年	郷	校攝津三輪	慶應三年	
學	舍肥前志久	安政六年	來	舍長門萩	慶應三年	
誠志	舍相模栗原	文久二年	集	所加賀金澤	慶應三年	
郷	校紀伊田邊	文久三年	郷	校備中市場	慶應年間	
市學	校攝津三田	文久年間	郷	校日向福島	不	
教導	所肥前飯田	文久年間	熊	舍播磨姫路	不	
學	校肥前川久保	文久年間	甲	堂播磨高砂	不	
温	故堂長門大田	慶應元年	郷	校播磨國包	不	
村學	校三河田原	慶應二年	郷	學播磨赤穂	不	
郷村學	校丹波綾部	慶應二年	敬	止堂讚岐丸龜	不	
廣德	舍豐後岡	慶應三年	敬	止堂讚岐丸龜	不	

郷學校は地方の士民若くは庶民教育機關としての學校で幕府の直轄になるもの江戸に三校(二) 他は諸藩の手に依り設立せられ地方文化の向上と普及とに重要な役割を演じた(第三表)。最も早く庶民教化に意を用ひたのは岡山縣で池田光政は寛文七年領内各地に手習所を置き、後併合して延寶三年閉谷學校を建て規模も擴大し平民の入學を許すと共に藩士の子弟も養成した。以來佐賀、攝津、加賀に郷學校の設立があつたが、一般に大躍進を遂げたのは第一圖に見る如く藩學校に遅れ文化文政時代である。これは吉宗の出現と共に學校設立の主旨が藩士の養成と庶民の教化に移り、以後學校觀念の擴大と西洋思想の影

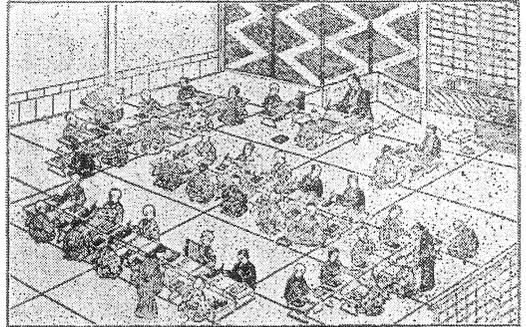


第一圖 江戸時代藩校學設立一覽圖(昭和十一年一月)

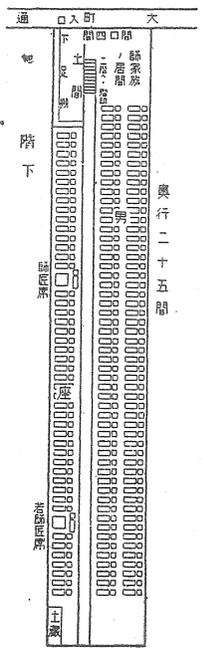
響に起因する結果である。  
 郷學校は閑谷學校、多久學校の最古のものが現存し、躍進期の文化文政建設のものは今日見るを得ないが、少くも藩學校の規模をや、縮小せしものであつた。建築は茅葺等粗末ではあるが、藩主の支出(五)になるもの多い点より私學寺子屋の如き簡單なものでなく講堂學舎その他の附屬建物が建築されたことが察知せられる。



講堂及附屬建物の平面図(四四方角、一尺四寸)

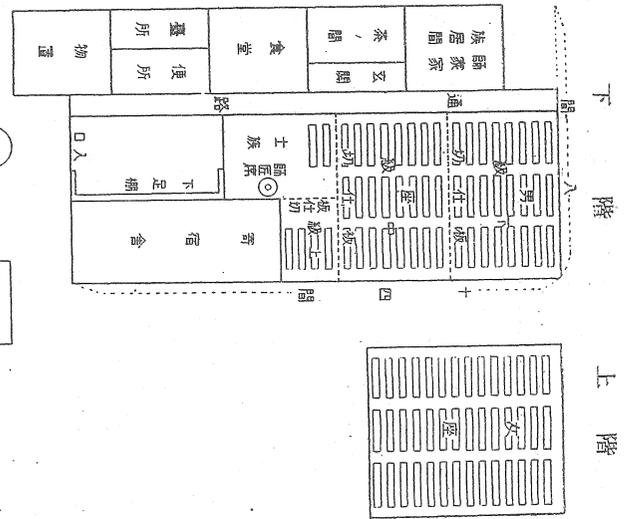


第二圖 寺子屋の圖(東京教育博物館藏)

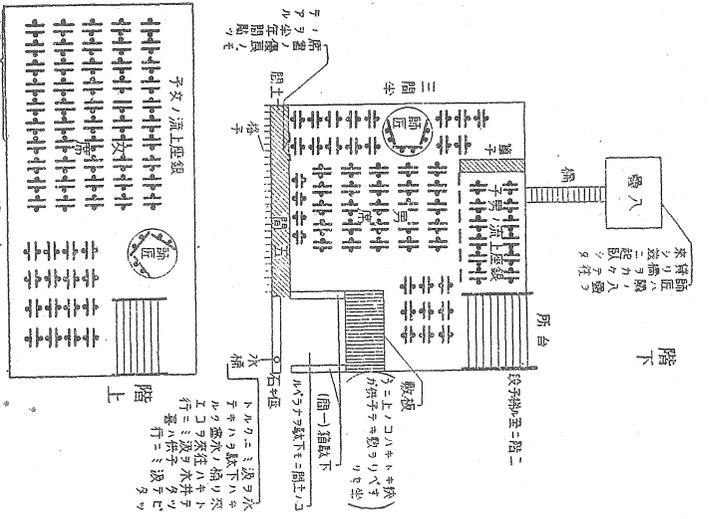


第三圖 秋田縣平鹿市津田寺市

第五圖 江戸幕府龍川堂平圖



第四圖 富山小西氏隆池居平圖



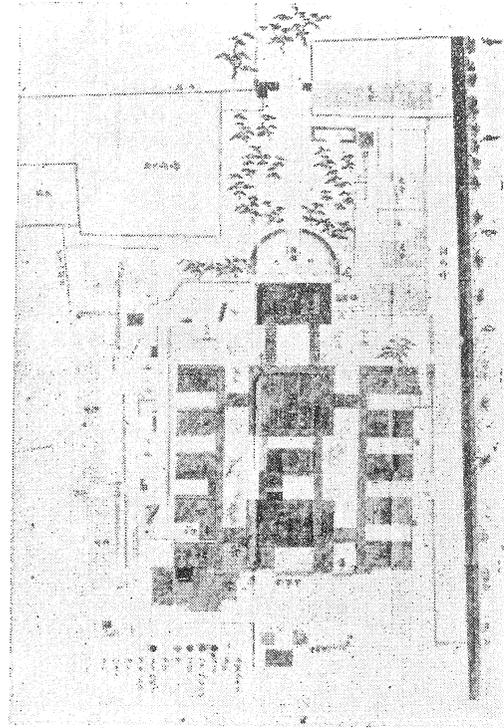
江戸時代の學校建築に就て

第四節 私學校

私學校即ち私塾と寺子屋及び郷學校の明確な區別は立て難い場合がある。(二六) 然れども諸學者は何れも塾舎を持ち子弟の教化に努めたことは明で、

その支出が純然たる私人の負擔であるものを私塾と見、庶民の初等教育機關を寺子屋と考へて差支へがなからう。私塾は全國で一、五〇〇程の多數に及び寺子屋の數は文明元年開業のもの最古とし一五、五六〇餘(二七)あり實際はなほ多數存在したことが考へられ、江戸時代に於ける國民文化が如何に隆盛であつたか認められる。

私塾の主なものゝ京都の講習堂(寛永年間) 近江の藤樹書院(二八)(慶安元年) 京都の古義堂(二九)(寛文二年) 大阪の懷徳堂(享



圖六第 岡山藩學校古圖(岡山女子師範學校藏)

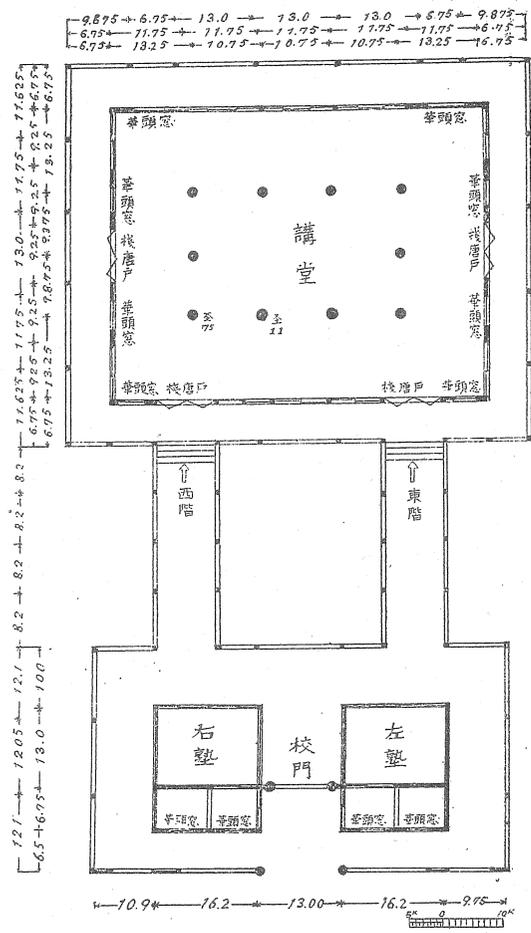
保一二年) 等で建築物の現存するものはほとんど絶無でその状態は明でない。然れども藤樹書院古圖等より考へてあるものは私塾として特殊の平面を持ち住宅を兼用して居つたことが察知

せられる。

寺子屋は市井の醫師僧侶神官平民等の經營で、その多くは住宅そのまゝを利用したがなほ大規模のものでは大廣間を設け、寄宿寮の設備もあり、これに師匠の住宅を附屬させた特殊の建築物であつたことは第二、三、四、五圖(三〇)に依つて知ることが出来る。

第三章 現存藩學校郷學校の建築

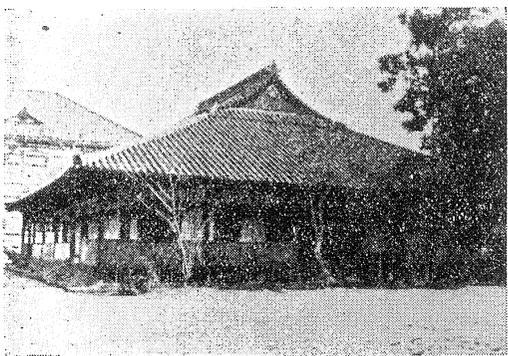
第一節 岡山藩學校



寛永十八年池田光政が花畠別邸を假教場として開校したに初まる。寛文六年泉八右衛門津田重次郎に命じて、岡山城内松平五郎八政種の舊邸を修繕して假學館を設け、花畠教場を廢して生徒を移した。この學校の特長は藩士の子弟と共に庶民に門戸を開放したこと(三二)建物も狹隘を告ぐるに至つて寛文八年岡山市西中山下祈禱寺圓乘院の舊地及藩士の家宅を合せて校地と

江戸時代の學校建築に就て

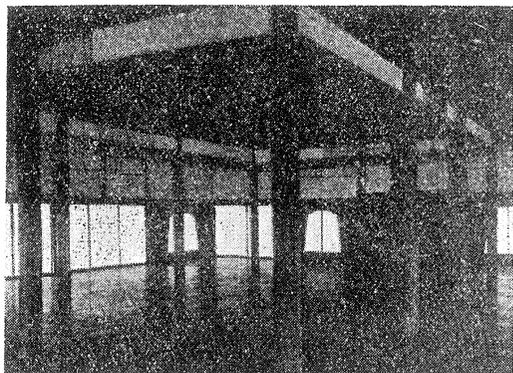
圖七第 → 岡山藩學校講堂平面圖  
圖八第 (同) 講堂外觀(昭和九年八月)



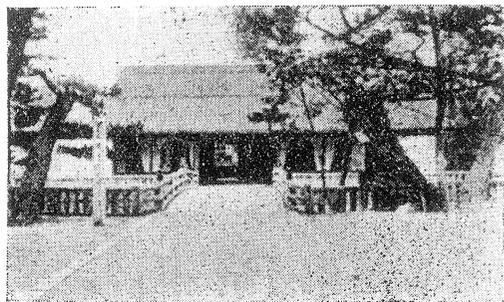
し學校の造營に着手、新建學校單に學校と稱した(三三)規模は第六圖(三三)の如く南より外門(泮池)校門講堂中室食堂と一直線に整然と並び、東に菊舎蘭舎梅舎橘舎梧舎、西に松舎竹舎柳舎槐舎杉舎の各棟が建ち其他に校厨文庫吏舎の數

棟三間があつた。現存建物は外門校門及び講堂である。

講堂(第七、八、九圖)五間四面の大廣間で外廻り一間通り廻廊吹放ち、屋根は鍛葺の如き破風の小さな入母屋造本瓦葺、柱は内柱以外總て角柱、側壁廻り華頭窓棧唐戸を附し、床拭板敷天井廻廊部



第九圖 同上講堂内部(昭和九年八月)



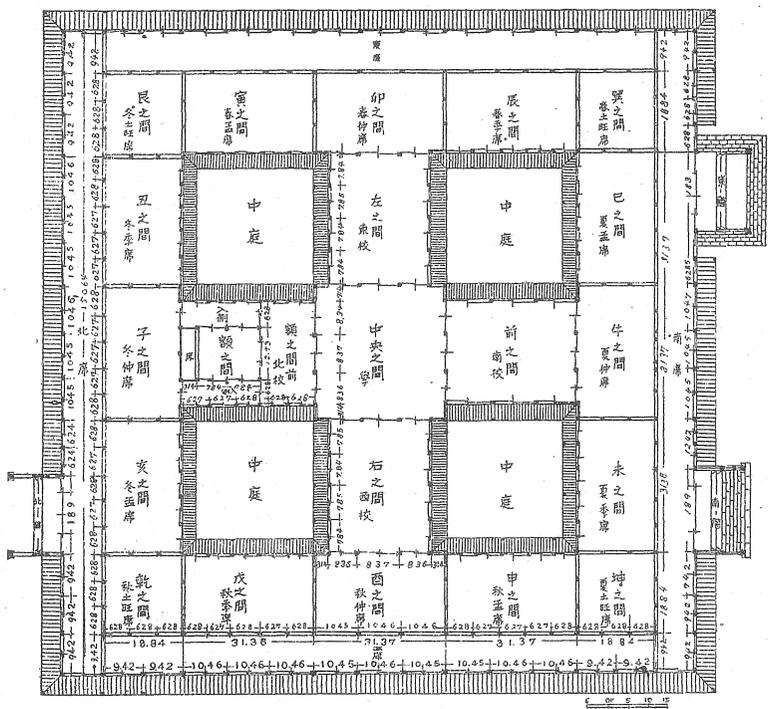
第十圖 同上外門外觀

を超えたもので學校建築なる新興建築に對して新機軸を生まんと苦心の跡が認められる。殊に講堂を中心とし學舎が何れも南面する如く整然と配置された計畫は良く學校建築の機能に立脚し、當代の教育精神をも知ることが出来る。更に當校に於て重要なのは藩學校として聖堂の建築を見なかつた點である。茲では講堂

分化粧屋根裏、その他は棟椽天井で構造形式共に簡素な建築である。  
校門(第十圖)外廻り一間通吹放ち床四半瓦敷、天井化粧屋根裏、左右に塾舎を設け床拭板敷、天井棟椽、屋根は講堂と同様、門として全く特異の形式である。  
外門(第十一圖)切妻造本瓦葺四脚門左に番所右に腋門を附し、更に續いて門番所があり全く特種の平面である。  
現存建築物を觀るに何れも當代の構造手法を示して居るが、その平面に於ては全く形式



第十一圖 同上外門外觀



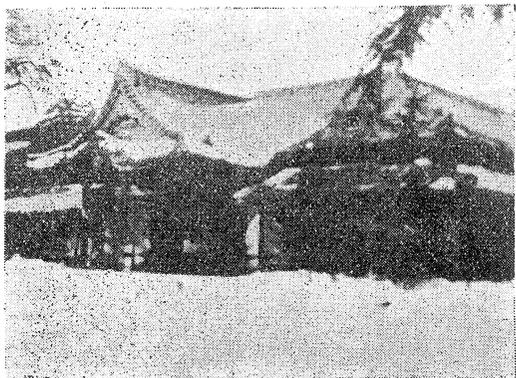
第二十圖 仙臺藩養賢堂平面圖

の奥の中室(三)に聖位が祀られ、中室は現存しないが、第六圖より見て恐らく講堂と同様の構造手法であつたことがうかがはれる。これ江戸に於ては忍岡弘文館の時代であり、學校建築の一施設としての聖堂建築が未だ重要視されなかつた證左と言へやう。

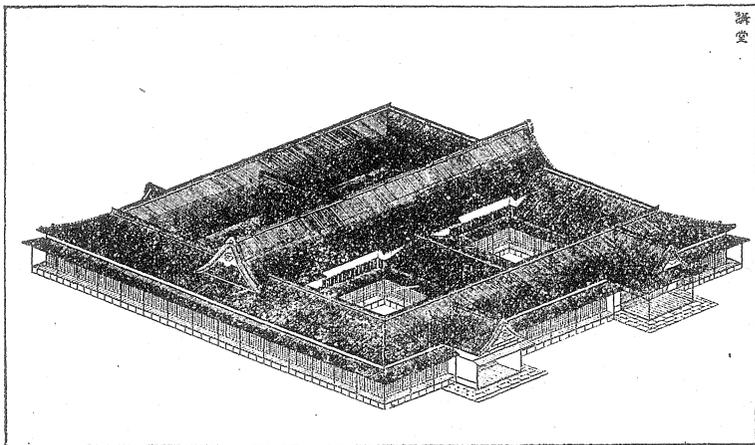
第二節 仙臺養賢堂

元文元年校地を北三番丁に選み建築に着手し明

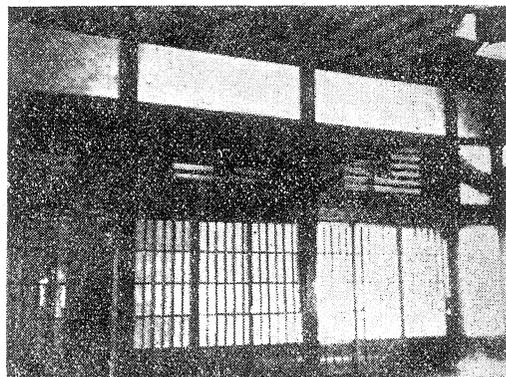
倫館養賢堂と稱したに初まる。寶曆四年學問所を北一番丁勾當臺通に移し規模を擴張し、寶曆九年單に養賢堂と改め、



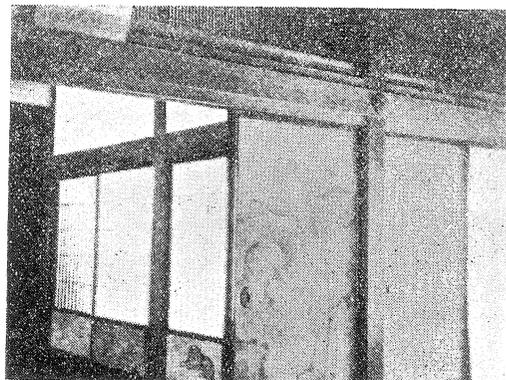
第三十圖 仙臺藩養賢堂外觀(昭和十年一月)



(載所誌小堂講)圖敵島上同 圖四十第



(月一年十昭)間之央中上同 圖五十第



(月一年十昭)る見を間の額より前間之額御上同 圖六十第

安永六年聖像を安置した。後文化五年大槻清進儒員となり同十一年館舎改作の命に接し十三年春講堂の新築を開始し翌十四年竣工した。こゝに舊の規模は明でないが養賢堂の建築は他の藩學校と大に異なり、學舎講堂御座間を一建築に集合したもので、その附屬建物も學頭邸宅、諸生學寮、劍槍教場等で従つて少なかつたことが察知せられる。現存のものは他に聖堂及び門がある。養賢堂(第十二、十三、十四、十五、十六、十七圖)田の字型大建築で屋根椽瓦葺、中庭を設け中央の一室を學と云ひ講堂に於て、その周圍を四區に分ち校と稱



(月一年十昭)關女南西上同 圖七十第

し東西南北に配し藩主の視學所を北校に設けて居る。更にこの周圍を一六室に分つて序と名付け、春夏秋冬に配し又十二支に依り名稱を附し各學課目に依る學舎となした。外廻り廊下は序と云ひ東西南北の四序である。各室何れも棹縁天井特殊意匠の欄間を設け化粧長押を巡らし六葉を打つ。只視學所のみ簡素ながら格天井とし床を作り、虎雁黄鳥等を描いた明障子、桐鳳凰竹等を描いた襖を入れて居る。玄關は東西北の三個所、東のみ入母屋造、他は切妻とし組物葦股等相當華麗に取扱つて居るが他は構造形式至つて簡單である。聖堂は養賢堂の前庭に現存するが、その規模も甚だ小で又様式上特筆すべき何物もない。

江戸時代の學校建築に就て

仙臺養賢堂の特異點は平面の総合的な處で、計畫者の優秀な技能を推察し得るが、かゝる類例のない田字型を形成した直接の過程は講堂小誌に依つて基の詰物(三)の結果であることが知られる。又室の數、疊數、襖繪等個々に就ても何等かの根據を有せしめたことは謡曲洋林の中に説明されて居る。(二)然しながらその結果は中心となるべき講堂の規模他藩に比して甚だ小となつて居る。従つて計畫に際しこれ等の根據の採用を可能ならしめた要因は一に仙臺藩の教育方針が庶民の入學を許可せず、生徒數も少く階級的の考慮を必要としなかつたことにしなければならない。

註 (一) 金澤文庫は學校として、なく單に書籍の蒐集、保存を目的とする文庫であつたとも言はれる。

(二) 足利學校は室町時代に於ては村校であつたが、江戸時代では單なる文庫に過ぎなく、藩學校として活動したのは明治元年より同六年までの短期間である。現存の聖廟諸門は文化八年の修築になるものであるが、この意味に於て、本論文に於ける藩學校の項より省略した。

(三) Seminar, Collegio. 建築形式は未だ判然として居ない。興味ある問題である。

(四) 大冢遜退「昌平志」卷一は精細な湯島聖堂の沿革史である。此れに依つてその建築物の狀況を察知することが出来る。本論の記述は主として大日本教育文庫學校編所載の同書に依る。

(五) 享保時代に於て昌平校は衰微の極に達して居た。日本經濟叢書卷二、三七〇頁「兼山麗澤秘策」聖堂にて毎日兩座講釋有之候(中略)先日に直參の八七人有之由に候、其後も半日共に聴衆わづかの儀と申候、後には有之間敷様に申候。

(六) 關野貞「建築史上より見たる古社寺の災害」建築雜誌三八輯四五―一號(三三頁)大正十三年三月。

藤田東湖「弘道館建設の由來」

この模型は現に水戸彰考館文庫に保存されて居るそうであるが、著者の昭和十年一月訪ねた時は管理人不在の爲遺憾ながら調査する機を得なかつた。

(七) 大正震災に焼失し、昭和九年ほど同様のものが、耐火磚造に依つて復興された。

(八) 正保四年長崎市東上町に創建、寛永四年移轉正徳元年落成した。唐風様式を用ひ輪奐の美を極めたと言はれるが、現在のものは舊建築を移轉に際し規模を小にせるもので、僅かに正殿及び香壇門が私人の有になつて居る。著者の昭和九年八月訪ねた處に依ると大成殿は規模も小、只天井の一部、向拜軒上の欄間彫刻等に舊建物の面影を認め、香壇門は向唐門で腋門を附し全く舊形のまゝであると言はれるが、大學の文を書した丹塗扉にのみ異色を認めた。

飯田須賀斯「長崎に於ける支那建築」東方學報五號二九一頁。

(九) 西村天因「尾張敬公」

名古屋市史學藝編所載「明倫堂」

(一〇) 「日本教育史資料」文部省編に依る建設年代の明なもの。

(一一) 大熊喜邦「江戸時代住宅に關する法令とその影響」建築雜誌三五輯四二〇號五四七頁(大正十年十月)。

(一二) 熊澤蕃山「大學異聞」日本經濟叢書一卷一六四頁(前略)治國平天下は心を正しくするを本とす。是政の第一なり。其上大君諸侯を親しみ給ひ、父子の如く心服するは學校あるによつて也。

(一三) 萩生徂徠「政談」日本經濟叢書三卷五二七頁「大抵五百石程の物入にては學校は出來すること也(中略)十萬石以上には右程の物入は心安きこと、上より被仰付ば何れも出來すべく又不被仰付とも仕方に寄つて自ら何れも取立つることにも可成。」

(一四) 深川教授所「享保三年」麹町教授所(寛政三年)麻布教授所(天保四年)。

(一五) 石川謙「日本庶民教育史」二一六頁に依ると郷學校中にはその維持方法、民間有志者の寄附になつたものである。

(一六) 寺小屋の意義は諸學者に依つて異なる。著者は建築史的立場より寺院に關係なしとする乙竹岩造博士、石川謙氏の説を採用する。

(一七) 日本教育史資料文部省編に依る。

(一八) 近江高島郡青柳村に遺跡がある。門、書庫を除いて現存の建物は創立當時のものでないが、昭和九年八月著者の訪ねたときは同所に焼失前建築の古平面圖が保存されてあつた。

(一九) 京都市東堀川下立賣に遺跡がある。書庫を除いて現存のものは創立當時のものでない。

(二〇) 乙竹岩造「日本庶民教育史」上巻所載の圖に依る。

(二一) 寛文六年の掟に「家中宗子八歳より二十歳の間入學望次第たるべし。但し二十歳以上の者並に庶子庶人たり共品に寄り可令入學事」とある。

(二二) 志賀正道「岡山藩學校史」

(二三) この圖は寛永以後のもので創設當初よりは校地や、縮小されて居るが重要部分には變更がない。

(二四) 校舎(三六帖、藩主臨學休憩所)竹舎、柳舎(三六帖、演武所)槐舎、杉舎(學寮)輔仁軒(四五帖、吏員休憩所)桃舎

(二四帖、勸定所)栢舎(三〇帖、輕置以下授讀習字所)橘舎(四七帖、士鐵砲、徒子弟授讀習字所)梅舎菊舎(三〇帖、授讀所)蘭舎(三〇帖、習禮所)諸生部屋(七帖、庶人學寮)。

(二五) 岡山藩學校に於ける孔子の神位は書軸にして釋菜(孔子を祈る儀式)も建設よりおくれ、天和二年より講堂にて初められた。

(二六) 仙臺市史七八頁。

(二七) 平泉叢書「養賢堂學制、講堂小誌」。

(二八) 諸曲洋林(前略)抑此講堂と申は。堂の四方凡そ二十五間。棟は九つ田字のごとく。先中央の一室は大桁に象り。其疊の敷は五十帖。四面に高く掲るは。是こそ十二辟卦のかたち。其前うしろ右左り。四間皆陰陽太少の位の敷と。合て是は四十疊なり。(中略)床の左右の梅と松元亨利貞の四徳を表し。扱又左りの其障子。蜂蟻と雕鳩を畫るは。是君臣の義夫婦の別。右の障子の虎と鷹。是こそ父子と兄弟の。親序の道を示すなり。(中略)其次は十二室。十二室の疊の敷敷は。月次の日敷を表し。四隅

江戸時代の學校建築に就て

の四間の疊の敷は四季の土用を象れり。其次四方へ廻れる間を四つに分しは。東西南北四方の位。(後略)云々」



他其	費館書圖		費校學臨及育			費校學年青			費校學業實		
	臨	計	臨	經常部		臨	經常部		臨	經常部	
				右ノ内職員給	右ノ内職員給		右ノ内職員給	右ノ内職員給			
計	時	部	時	部	部	時	部	部	時	部	部
1,200,000	1,800,000	1,800,000	1,800,000	1,800,000	1,800,000	1,800,000	1,800,000	1,800,000	1,800,000	1,800,000	1,800,000

### 文部時報刊行計畫摘要

**一 目的** 本省行政ニ關スル法令竝ニ諸般ノ施設事項ヲ周知セシムルト共ニ所管ノ行政及教育機關等ノ聯絡提携ニ便ナラシムルヲ以テ目的トス

**二 内容** 本時報登載事項ノ大要左ノ如シ

勅 令 書 勅 令 語 法 律  
訓 令 令 閣 令 省 令  
訓 示 示 告 告 告 諭  
法 令 解 說 指 令(例規トナ)  
任 免、陞 叙、敘 位、敘 勳 質 疑 應 答(本省ヨリ公文ニテ)  
講 演、講 話、談 話 表 彰 復 命 書 及 報 告 書  
人 事 公 研 究 調 査 告 告 統 計 寫 真

**三 編纂** 文部時報編纂ノ爲メ編纂委員長竝ニ編纂委員若干名ヲ置ク  
編纂委員長ハ文書課長ヲ以テ之ニ充テ編纂委員ハ文書課員中ヨリ之ヲ命ズ

必要アルトキハ審査委員ノ意見ヲ求ムルコトアルベシ  
資料蒐集ノ爲省內各局課ニ文部時報報告委員ヲ置ク  
文部時報報告委員ハ各局課ノ理事官、屬、囑託等ヲ以テ之ニ充ツ  
必要ニ應ジ直轄各部、各府縣其ノ他ヨリ資料ヲ求ムルコトヲ得

**四 發行** 本時報ハ菊版、每號約六十四頁、定價金貳拾錢ヲ標準トシ毎月三回一ノ日ヲ發行期日トス

### 定 價 表

一 部	金 貳 拾 錢	送料共
一 一 月	金 六 拾 錢	送料共
一 六 月	金 參 圓 六 拾 錢	送料共
一 一 年	金 七 圓 貳 拾 錢	送料共

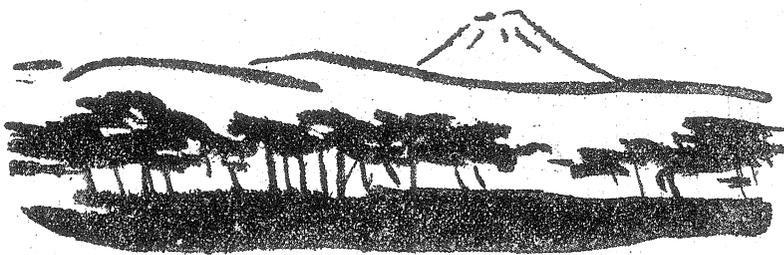
●臨時増刊又は増大號發行の節は別に代金申受けます  
●御社文は總て前金に願ひます前金切れの場合には送本いたしません

廣告料は一頁五拾圓、二分ノ一頁參拾圓、四分ノ一頁拾八圓とす  
掲載頁數は壹部毎に拾參頁を越ゆること  
右文部省の御指定に依つたものです

昭和十一年八月十九日印刷納本  
昭和十一年八月二十一日發行 (第五五九號)

發行所 帝國地方行政學會  
東京市東橋區銀座西七丁目一番地  
電話總機六〇、六六一、六六二、六六三番  
振替貯金口座東京十三番

發行者 大谷仁兵衛  
印刷者 大庭公平  
印刷所 行政學會印刷所第二工場  
東京市牛込區西五軒町五十二番地  
電話牛込二九九六番



# 文部時報 第五百六十號 目次

卷頭 (明治天皇御製三首).....一

文部時報改善一週年に際して..... 文部時報編纂委員一同.....二

東北地方と移植民教育.....盛岡高等農林學校校長 上村勝爾.....三

教育書道の理念.....廣島高等師範學校講師 石橋啓十郎.....二

江戸時代の學校建築に就て(二).....名古屋高等工業學校助教 城戸久.....一七

## 復命書

昭和十年度文部省視學委員復命書抄

英語..... 文部省視學委員福岡高等學校教授 大内覺之助.....三七  
圖畫及手工..... 文部省視學委員東京美術學校教授 多賀谷健吉.....四〇

## 農山漁村に於ける學校の實際

農村更生と本校の教育.....長野縣浦里高等小學校校長 村上茂吉.....四二  
同 青年學校長

資料 文部省沿革略(七)..... 文部大臣官房文書課.....五五

告示..... 文部省告示第三百七號(田川商工實務學校開校期日變更認可)・同第三百八號(小學國語讀本尋常科用卷八定價).....七〇

敘任及辭令(自昭和十一年八月十一日至同二十日公表ノ分等).....七〇

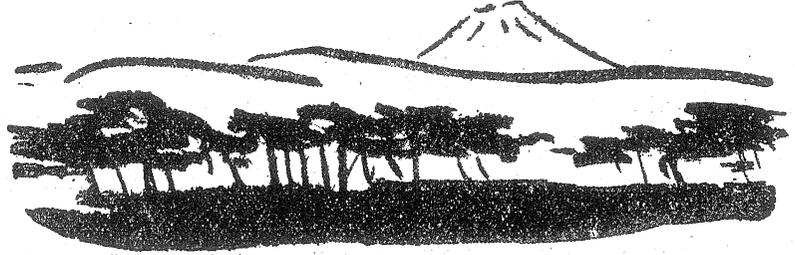
彙報..... 檢定教科用圖書——實業學校長認可——公民教育講座開設——推薦映畫——蓄音機「レコ」  
「ド」推薦——活動寫真「フィルム」認定——昭和十一年度第二豫備金支出——大日本史

料出版——休職滿期——退職——死去.....七九

文教問答.....八三

昭和九年度文部統計摘要(五).....八四

統計 昭和十一年度地方費豫算(五).....八九



見ねばならぬ事柄ではあるまいか。兒童には兒童に特有なウブな結體と筆使ひがある。書を單なる技能科とするならば問題はなにかも知れぬが、少くとも美的陶冶を含む東洋藝術の一科としての習字や書方とするならば、今少し自由な表現も鑑賞もあつて然る可きだと思ふ。例へば尋二、三年に於て課する單獨體の平假名は五年、六年で課する連綿の平假名とはその趣きを異にして差し聞へないと思ふ。何となれば一つは楷書の中に調和する強い獨草的のものであり、他は行書と調和する草假名でなければならぬから。

#### 四 精神性

次に教育書道の第四の特性として書道の精神性をあげなければならぬ。そしてこの精神性こそは教育書道と實用書道乃至餘技書道と區別すべき重要なポイントである。

由來東洋の諸藝は人格性と結合して何々道と呼ばれ一藝一能に達することによつて同時に人間をつくることを忘れなかつた。ことに書道に於ては前にも述べた如く心畫説が傳統的信念となつてゐるだけ人格性と密接な關聯を保つて來た。彼の顏眞卿の書は之を貴ぶも趙子昂のものは書としては好きだが之を習つてゐることを人に隠すと云ふやうなことの行はれたのも、つ

まり顏氏は忠烈無雙の士であり、子昂はその節操に於て如何はしい點が存すると云ふやうな考へから出てゐるのであらう。  
宋の蘇軾は「人貌有<sub>二</sub>好醜<sub>一</sub>而君子小人之態不可<sub>レ</sub>掩也。言有<sub>二</sub>辯訥<sub>一</sub>而君子小人之氣不可<sub>レ</sub>欺也。書有<sub>二</sub>工拙<sub>一</sub>君子小人之心不可<sub>レ</sub>亂也」と述べ、程明道は「作<sub>レ</sub>字須<sub>レ</sub>敬」との命令的言辭を用ひてゐる。かゝる點から考察して今日の小、中學校の書方科、習字科と云ふものが多くこの精神性を忘れて徒らに結果主義に陥り、實用的功利的打算のみこととし、手習道による靜觀性の教養と云ふやうなことを忘れてゐるやうに思はれる。教育書道の本質は一枚の筆によりよい清書を作ることではなくして、己れの振ふ一管の筆に自己の全生命を託して三昧無碍に習ひ行く過程そのものに存すると云つてもよい。そして實用的書寫能力の擴充の如きもそこから自然に生來するものである。

以上吾々は教育書道の理念として四つをあげたのであるが、かくして教育書道の本質は藝術書道の追従でもなく、實用書道のお先棒でもなく、それ自身独自の天地の存することを自覺せねばならぬ。それ故に教育書道の行手は寧ろ此の實用書道と藝術書道の辯證的發展の途上にあると云つてもよい。

## 江戸時代の學校建築に就て (二)

### 名古屋高等工業學校助教 城 戸 久

#### 第三節 伊賀上野崇廣堂

津藩の藩學校たる有造館の分校で文政四年普請奉行渡邊高助、西庄原左衛門に依り建築せられた。規模は南に正門を開き中央に講堂その他附屬諸室を設け室の西有恒寮(童兒修學所)思齊舍(武道場)育生寮があつた。現存のものは講堂及附屬建物正門御成門である。(二七)

講堂(第十八、十九圖)入母屋造檼瓦葺七間四方の大廣間で外側腰高障子を入れ、内部側廻り化粧屋根裏をそれより床一段高く角面取柱を建て、棟縁天井構造手法簡素で柱上部肘木化粧長押六葉を打つ。大玄關は入母屋造、柱上部大斗肘木各室天井は棟縁長押を巡らし六葉を打つこと講堂と同様の手法である。

正門(第二十圖)切妻檼瓦葺の長屋門で、門柱門扉柱型朱漆その他白漆喰塗俗稱赤門の名がある。右方は門番所出格子あり、左は長屋にて藩學生の寄宿寮であつた。

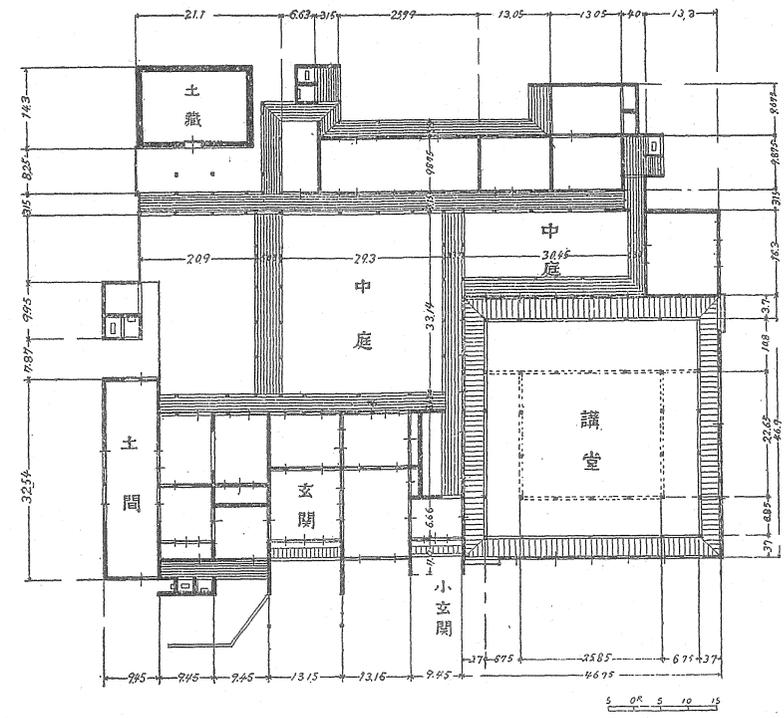
江戸時代の學校建築に就て

御成門(第二十一圖)藥醫門で明治年間移築され場所は舊と異なる。

崇廣堂は藩學校中分校に屬して居るからその規模決して大とは言得ない。且つ構造も他藩學校に比して甚だ粗末である。これは當校建設の論達(三〇)に見る如く當時の藩財政の困難であつた結果であるが、なほかゝる大講堂の建築を敢て興したのは文化文政に於ける學校建設が如何に隆盛であつたかを示して居る。又その特異點は聖堂を持たないことである。然し津に於ける有造館には大成殿が建築せられたから(三一)分校たる崇廣堂では經濟的に省略せざるを得なかつたもので、一面既に文化文政の儒學に對する觀念の變革を示せるものであらねばならぬ。

#### 第四節 水戸弘道館

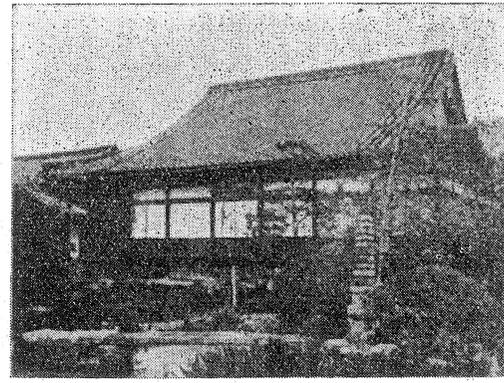
天保十一年徳川齊昭學校建設を企て水戸城南三の丸と北三の丸の地士大夫の宅十二區を移し建築に着手同十二年竣工し



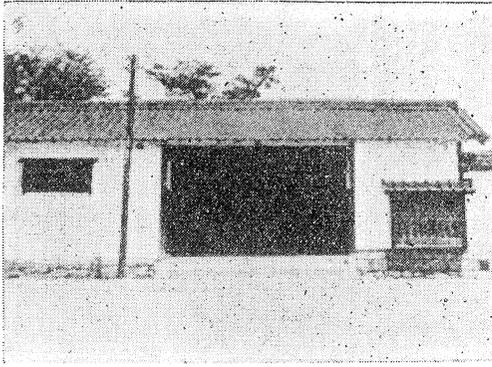
（月一年五和昭）圖面平堂廣崇野上賀伊 圖八十第

た。(三) 萩明倫館と共に最も近世に屬するもので、その規模も頗る大きく(第二十二圖)正門より正門、離正廳、離文館南に武館、聖堂、鹿島神社、弘道館碑(三)を蔽つた八卦堂その他附屬建物が整然と建築された。現存のものは正門正廳聖堂八卦堂鐘樓である。

正廳(第二十二、二十三、二十四、二十五圖)棧瓦葺書院造複雑な平面型で二部に分れ、一は御書院他は御座間を中心とする諸室で、これを長廊下で連絡



觀外上同 圖九十第

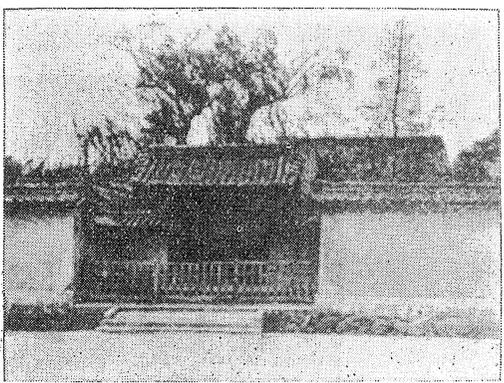


觀外門正堂廣崇野上賀伊 圖十二第

して居る。内部は各室棹縁天井化粧長押を巡らしたのみである。御書院は他藩學校の講堂に相當するもので水戸藩弘道館がその規模雄大であるにかゝらず、大廣間型の講堂を持たなかつたことは、この藩の學校建設の主旨が未だ庶民教化に至らなかつたものと考へられる。

聖堂外門(第二十七、二十八圖)聖堂は三間四方入母屋造本瓦葺の建物で、圓柱上部組物をつけ華頭窓蔭戸を設けた和唐混交様式で内部格天井瓦敷中央に黒漆塗屏のある聖壇を設けて居る。大棟の兩端に異様な鳥形の蚩吻をつけ留蓋瓦に猿を用ひ、幾分異様な手法を行つた跡を認められるが、その根本の構造様式江戸末期より一步も出て居ない。外門は四脚門圓柱で聖堂と

江戸時代の學校建築に就て



觀外門成御上同 圖一十二第

同じく棟飾(三)のみ異色がある。

正門(第二十六圖)本瓦葺四脚門である。

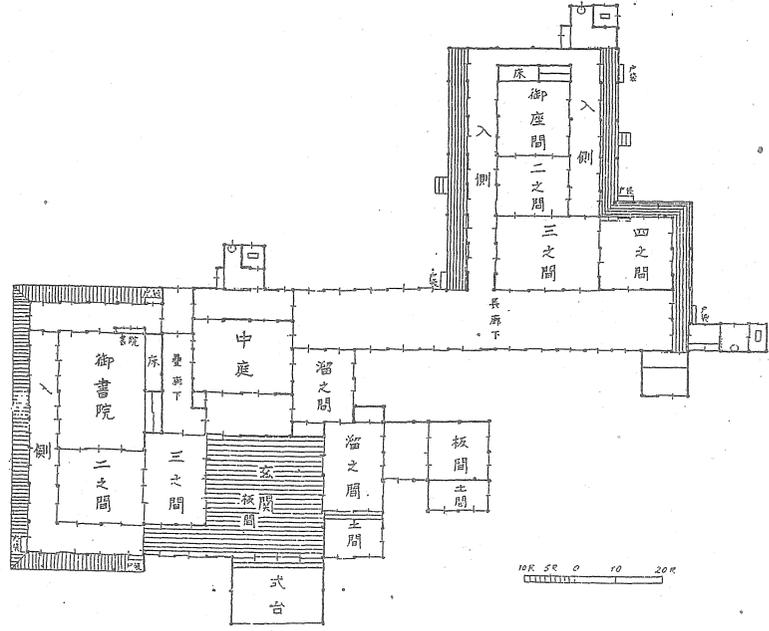
水戸弘道館では講堂を有せず、書院でその目的が達せられ、聖堂の建築に幾分支那風の趣を出さうとした點が現はれて居るのは注意されるべきであらう。

第五節 萩明倫館

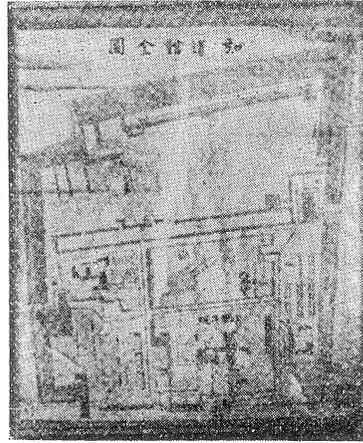
享保三年毛利吉元坂時存八谷通良營作に任じ藩學を興したに初まる。

聖堂を本堂と稱し學問寮手習兵學射術禮式槍術劍術等の學舎が建築された。(第二十九圖)

後嘉永二年社會の狀勢に應じ毛利敬親地を改め規模内容共頗る大なる藩學を建築した。(第



（月一年十和昭）圖取見面平館道弘戸水 圖二十二第



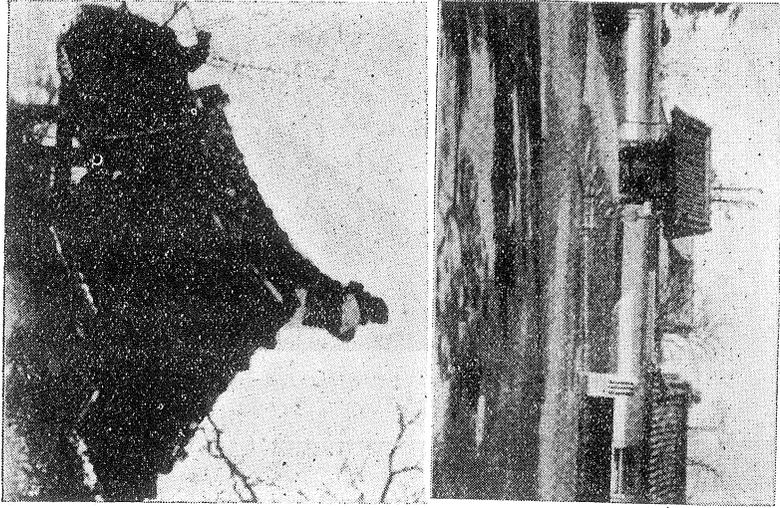
圖舊館道弘戸水 圖三十二第  
（月一年十和昭）（藏館道弘戸水現）

三十圖）

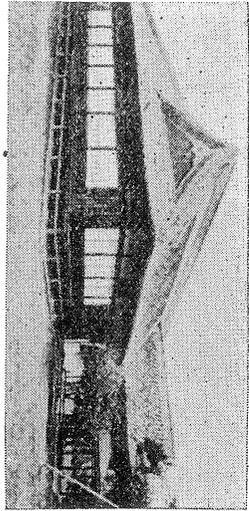
主なる建物としては南門聖廟講堂諸生寮御殿醫學館その他劔術槍術射術場及び教官住宅で、現存建物としては他國修行者引請の劔術槍術場と現秋市海潮寺本堂となれる聖廟等である。

劔術槍術場（第三十一圖）建設當時の位置にあり、入母屋造棧瓦葺外部堅板張内部は劔術場槍術場及上覽場その他の小室で、江戸時代この種建物の餘影を傳えて居る。聖堂（第三十二圖）明治九年現在の海潮寺本堂に移された入母屋造本瓦葺の大堂である。正面突出部分破風飾化

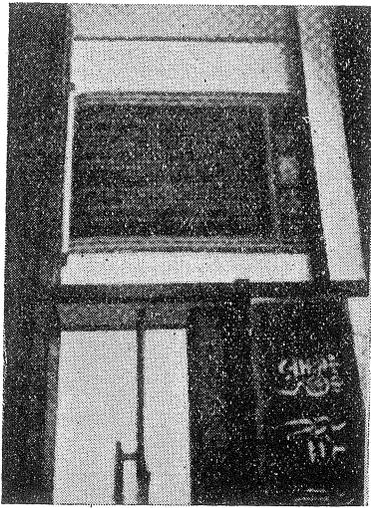
江戸時代の學校建築に就て



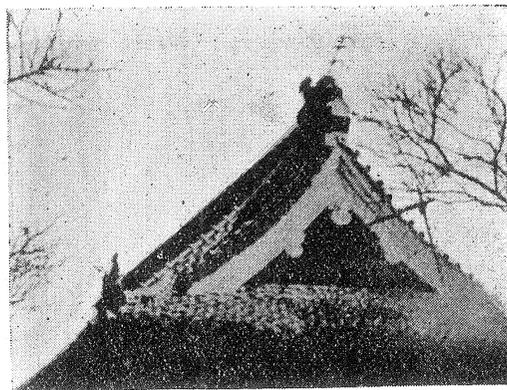
第二十六圖 同上校門全景  
第二十七圖 同上孔子廟外門切妻（昭和十年一月）



觀外館道弘戸水 圖四十二第



（月一年十和昭）間之床院書堂講上同 圖五十二第

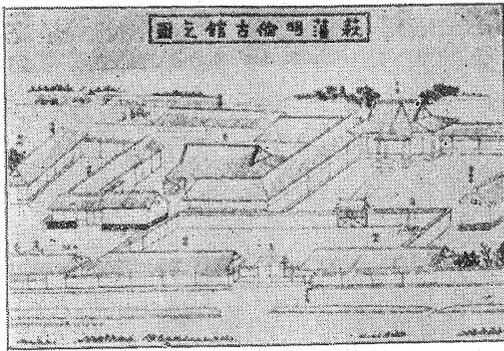


（月一年十和昭）屋母入剛子孔上同 圖八十二第

粧長押欄間等純當代の手法であるが相當華麗である。只大棟兩端に銅板張の大なる沓形を上げたのは特異の趣を出し内部疊敷、舊は聖壇を中心として西房東房（八帖）西室東室（八帖）中室（二二帖）前室（二二帖）及び一間通り入側を巡らした。

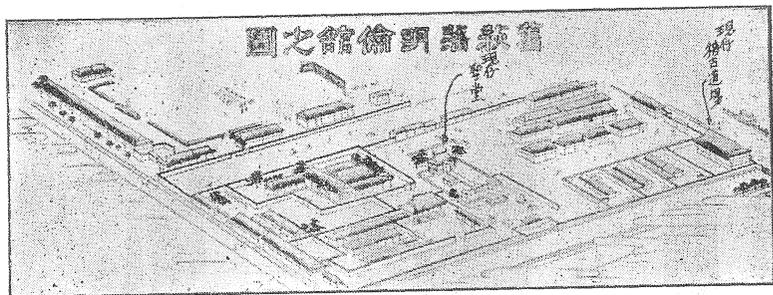
講堂現存せざれども九〇帖敷の大廣間にて屋根入母屋造前面にのみ廣縁を附した。  
萩明倫館は現存藩學校中最も近世であるためか、その規模も他に見ざる完備せると聖堂の純然たる當代の手法を踏襲した點觀るべきである。

第六節 岡山藩閑谷學校



圖之館古館倫明萩 圖九十二第

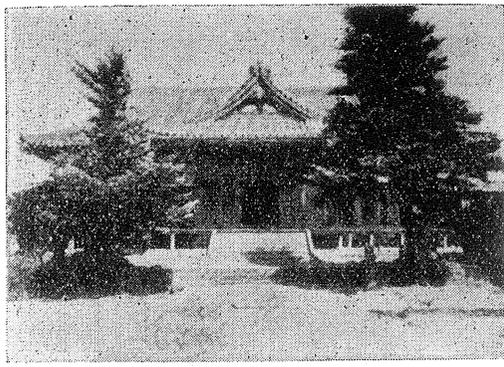
（月八年九和昭）（藏校學小倫明市萩）



（月八年九和昭）（藏校學小倫明市萩）圖館倫明萩 圖十三第

第三十一圖 萩市海潮寺本堂全景

（舊明倫館聖堂）（昭和九年八月）



寛文八年岡山藩主池田光政備前和氣郡木谷村に手習所を設け、同十年津田光忠に命じ學校を建て閑谷學校と稱したに初まる。後十二年學房及び飲室成り延寶元年講堂、同二年聖

江戸時代の學校建築に就て

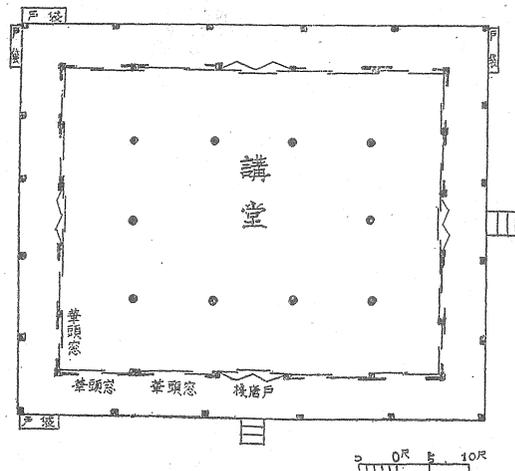
堂が建築せられ、同五年講堂の茅屋を瓦屋となし貞享元年從來の聖堂を改築し新聖堂が成つた。元祿十四年新講堂釣屋習藝齊飲室が建築された。（三五）

現存の郷學校としてその規模を知 第三十二圖 萩明倫館剣術槍術場

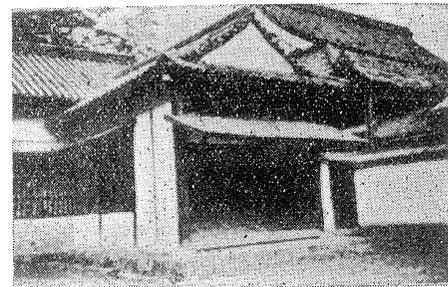


景全校學谷閑市山岡 圖三十三第

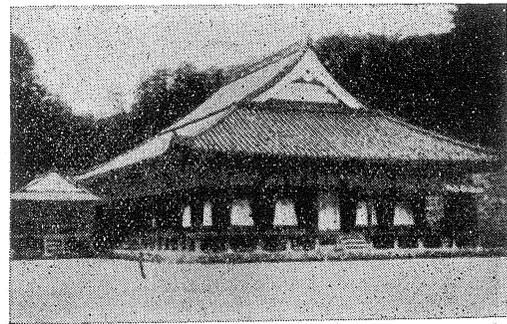
り得るもの本校のみで貴重な遺構である。現存の聖堂(大成殿祠堂その他厨文庫)校門、講堂、公門、習藝齋、飲室、釣屋、飲室門、校厨門の外に茅屋ではあるが教官住宅學房習字所厨舍客舍倉庫の類數棟があつた。殊に學舎と寄宿舎との境に防火の爲塙を周圍に又堅固な石壁を設け嚴然たる一區劃を形成して



(月八年九和昭)圖取見面平堂講上同 圖四十三第



(月一年十和昭)關玄堂講上同 圖五十三第

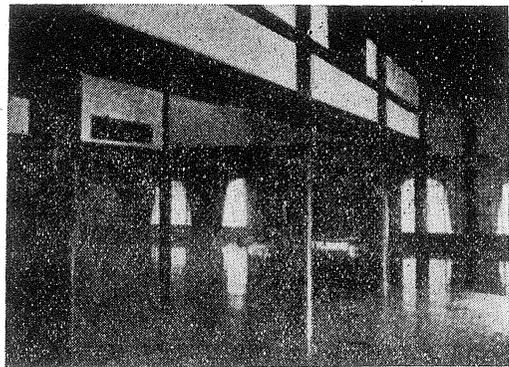


景全堂講學校谷閑山岡 圖六十三第

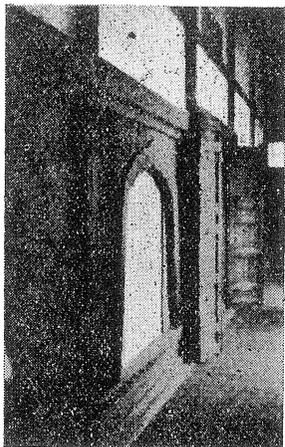
居つた。

講堂(第三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八圖)鍛葺型の入母屋造伊部藥掛本瓦葺の大講堂で構造形式岡山藩學校とほぼ同様簡素であるが、その精緻な點他に見ない立派さである。

聖堂(第三十九、四十、四十一圖)外門祠堂文庫厨庫と一劃をなして居る。三間四面の入母屋造本瓦葺伊部藥掛瓦を用ひた小室で柱上部舟肘木化粧長押を巡らし、床を四半瓦敷としたる全く純然たる當代の手法である。只



(月八年九和昭)部内堂講上同 圖七十三第

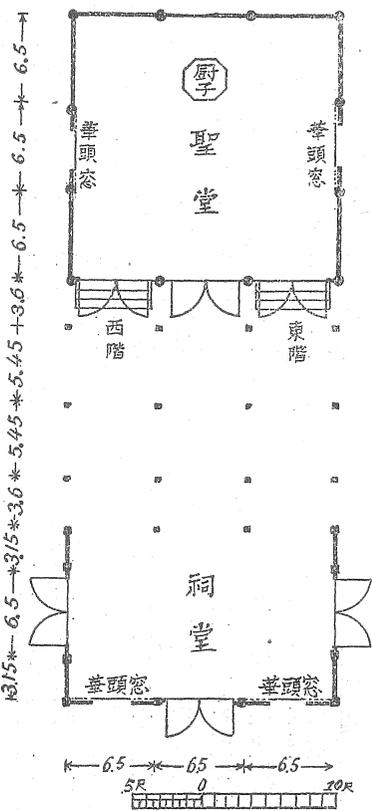


(月八年九和昭)廊外堂講上同 圖八十三第

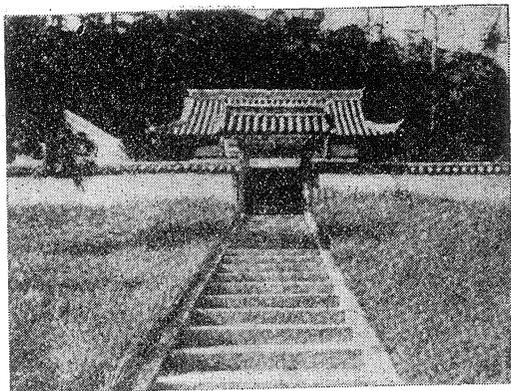
に號を上げ木鼻虹梁等異調を帯びた處が認められる。聖堂が純然たるこの期の様式を踏襲して居るに反し、この門のみかゝる形跡があるのは甚だ奇異な事實で、これは聖堂建築(貞享元年)より遅れて講堂と同じく元祿十四年三三の建築になり、湯島聖堂の影響を受けたものと考へねばならぬ。

平面に於て入口を左右に別け東階西階を設けたのは岡山藩講堂と同時にやゝ特殊の點である。(三六)

校門(第四十二、四十三圖)聖堂の前面にあり。鶴鳴門と云はれる。切妻造本瓦葺の兩脇に袖を附し門番所を形造つた特殊の平面で、正面開口迫持型となし大棟



(月八年九和昭)圖面平堂聖上同 圖九十三第



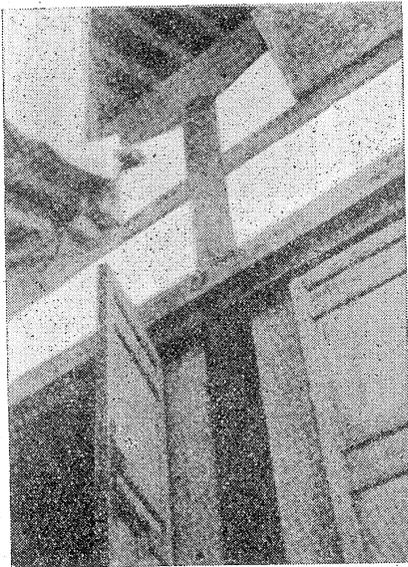
(月八年九和昭)景全堂聖同上 圖十四第

公門(第四十四圖)藩主の御成門で木割雄健規模や大である。その他飲室門校厨門は公式的な門でなく規模も小であるが、只校厨門(第四十五圖)は教官住宅厨房の門で棟兩端に波形の棟飾りを附したのは異調の片鱗で、校門と同じく注意するに足る。

閑谷學校は校門校厨門に支那風の異調を帯びしめた痕跡のあるのは、全般的に江戸時代學校建築の上より聖堂建築様式の興味ある推移を示して居る。

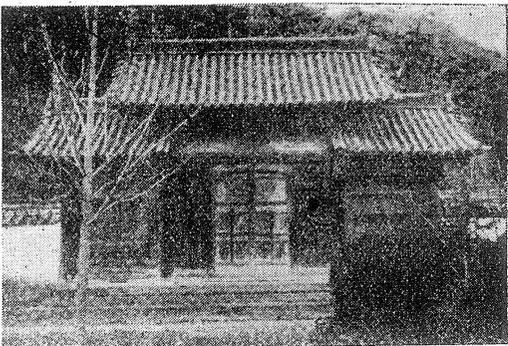
### 第七節 佐賀藩多久學校

元祿十二年佐賀藩國老多久茂文肥前小城郡多久村に興した郷



(月八年九和昭)細詳觀外同上 圖一十四第

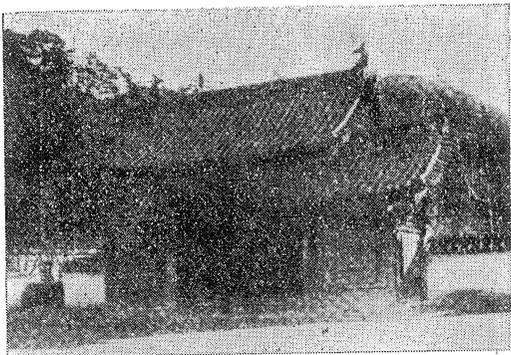
學校で東原厩舎とも云ふ。元祿十四年假りに聖廟を校側に營み、寶永五年新聖廟が落成した。學校の規模は明でないが敷地跡から相當の各種建築物があつたやうで聖廟及び前面に石門(第五十二圖)を現存する。  
聖廟(第四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一圖)も泰安殿とも云ひ重層屋根入母屋造銅板張(舊は柿葺)正面一間通向拜屋根向唐破風造の建築で正側面一間通りを吹放ちとし、内部は外陣、内陣、祭壇の三部に分れ、全く従來の建築に見ない特殊の平面である。手法は概して唐様を用ひ虹梁木鼻その他に



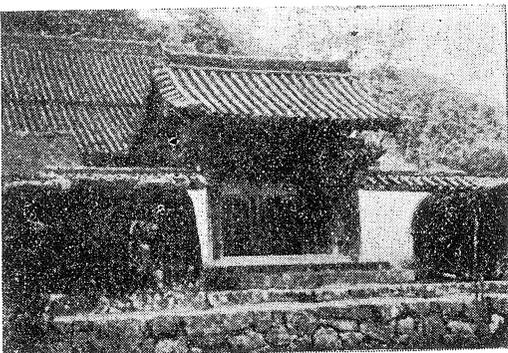
(月一年十和昭)景全門校同上 圖二十四第

この聖廟は現存聖堂建築中最も異調を帯び壯麗なものであるが、なほ獨立して建築されたのではなく東原厩舎の一施設に過ぎなかつた。

### 第四章 藩學校郷學校建築の特殊性



(月一年十和昭)景背門校同上 圖三十四第



(月一年十和昭)景全門公同上 圖四十四第

### 第一節 講堂の形式

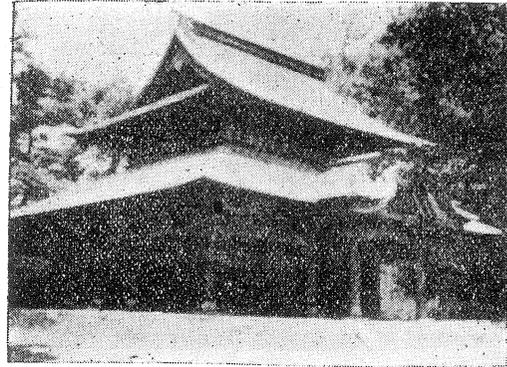
當代の教育としては儒學を主としたが、なほ習禮習字算法その他近世では洋學等多數の學課目があり、個々の學舎で教授せられ多數の建築物があつた。中でも講堂は何れの藩學校に於ても、その中樞をなしたことが認められる。講堂

鱗、鳳、龜、魚、龍、草木等の彫刻を飾り丹塗彩色を施し、内陣天井には龍を描き床瓦敷き扉は棧唐戸を用ひて居る。聖壇の孔字籠、勾欄、階段及外部柱礎盤等の部分是比较的支那風様式に近似した異調を出して居るが、建築全體の構造手法は従來の踏襲である。

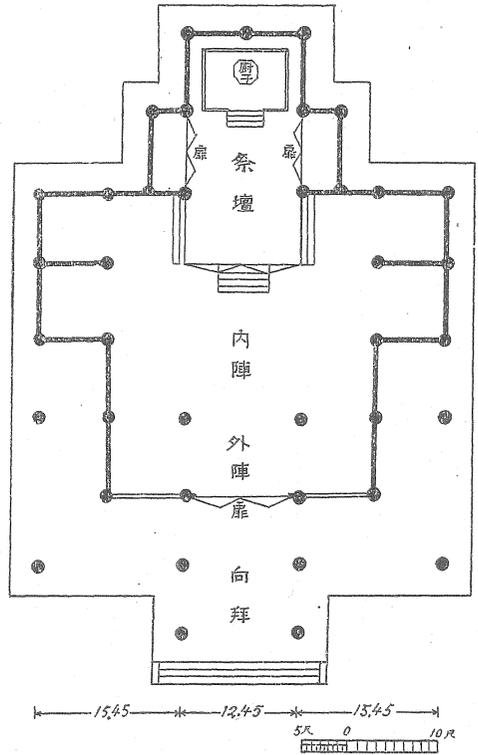
江戸時代の學校建築に就て



圖五十四第 同上聖廟平面具取圖(昭和九年八月)



圖七十四第 (月八年九和昭) 觀外上同



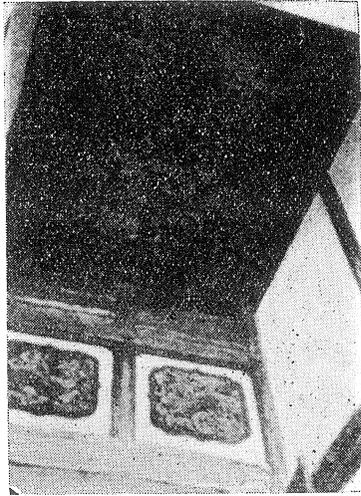
第四十六圖 同上聖廟平面具取圖(昭和九年八月)

は書院と呼ばれて居るものもあるが、要するにその目的は多人數を一堂に會せしめ教授する施設である。この同一目的の建築物を総合的に考察するに少くも三つの異つた形式の下に分類することが出来る。これを廣間型、書院型、綜合型とし現存遺構及びその他の主要なものに就て見れば次の如くなる。

第一類 廣間型(大略正方形の獨立建築のもの)

岡山藩學校、岡山閑谷學校、伊賀上野崇廣堂、萩明倫館

者を引見し治教の要道を聽聞した戰國諸將の先例になつたもので、徳川幕府の開設に依り封建の基礎定まり天下泰平となると諸侯の間に好學の風が愈々熾となつた。最初は藩主限り聽講したものが一般藩士の陪席を許すやうになり、やがて進んでは一般藩士を目標中心とするやうになつた。こゝに講堂と云ふ特殊の建築物が藩士の居間以外に別に建築せねばならなくなる。



圖八十四第 (月八年九和昭) 細詳井天陣内上同

第二類 書院型(書院造のもの)

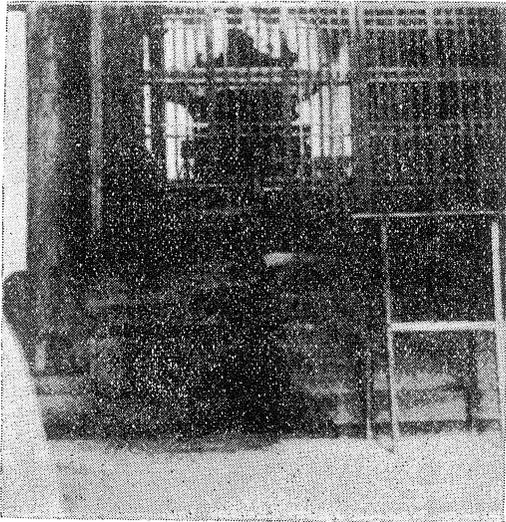
水戸弘道館、尾張明倫堂(第五十四圖)、岩國養老館(第五十三圖)

第三類 綜合型(學舎と講堂を一建築に集合したもの)  
仙臺養賢堂

然して各藩學の模範となつた湯島聖堂の講堂は書院型に入るやうであるが、これ等の形式が如何に生じたかの問題は少くも藩學校設立の初發的段階とその教育主旨から押し考へねばならぬ。

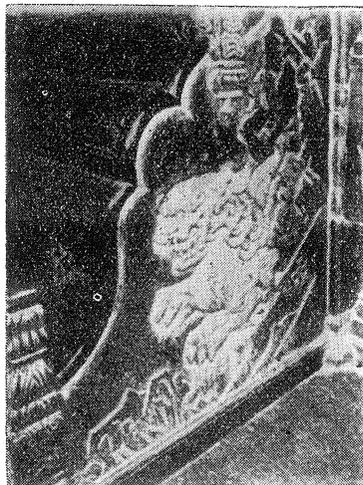
江戸時代に於ける藩學校成立前の經過を溯ると戰陣の間に備

江戸時代の學校建築に就て

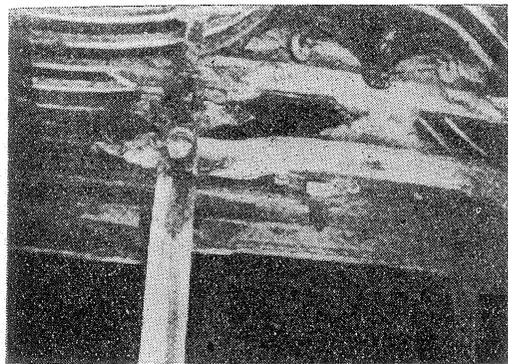


圖九十四第 (月八年九和昭) 細詳陣内上同

従つて講堂を中心とした藩學校が極めて自然に設立された。更に藩士の教育を目標としたものが時代の進展に應じ、一般庶民にまで及び月何回かの定期的な所謂成人講座式の教育方法が行はれるやうになれば、その講堂の形式が必然的に能ふ限り多人數を收容し得る廣間型講堂を要求する。かく平面に見る如く外廊並びに内部柱の外及び内の三階級に分ち得られ、封建時代にあつてはなほ士庶共學に何等差支へない平面型を構成する。廣間型建築の要因は一に藩學校建築の初發的段階が定期講話から初まり、進んで一般庶民にまでこれを開放せんとした結果からと言ふことが出来る。



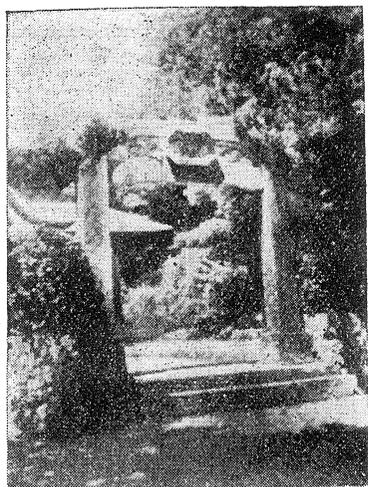
段階壇聖上同 圖十五第



(月八年九和昭)細詳拜向上同 圖一十五第

た。(四〇)かゝる家塾より發展せる藩學校は講堂と名付けられるも只書院を形成するのは必然的の歸結である。

更に設立が比較的近世に屬し家塾より發展したものでなくとも庶民の入學を許可せず専ら、藩士の養成にのみ意を注いだものも當然この形式となる。又小藩の藩學校では藩財政の窮迫をこせる安永天明文化文政の時代にあつて如何なる必要ある



(月八年九和昭)門石校學久多 圖二十五第

にせよ廣間型建築は決して經濟的に可能でない。従つてかの岩國藩養老館に見る如く多數の小藩學校では、その講堂が書院型であつたことが察知せられる。

仙臺養賢堂の平面は他に類例を見ないものであるが、これは講堂を中心とし各學舎を一建築物に綜合したと見るべきで、講堂たる中央之間も従つて狭く庶民教化にまで進展しなかつた結果に外ならない。

第二節 聖堂建築

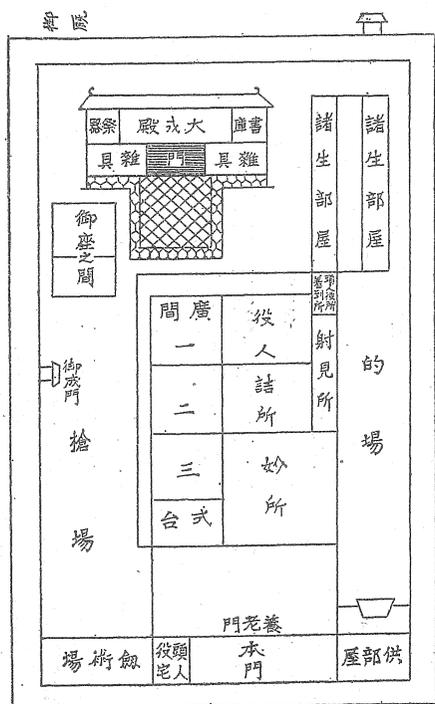
従來日本建築史上儒教建築として、その様式的特

江戸時代の學校建築に就て

異性の爲重視されて居るのであるが、これを仔細に観るときその發生より消滅に至る間に種々の變遷をなし、單に聖堂建築のみが支那風異調を帯びたとは言得ない。學校建築の一施設としてこれを四時代に分けて少くも考察することが出来ると思ふ。

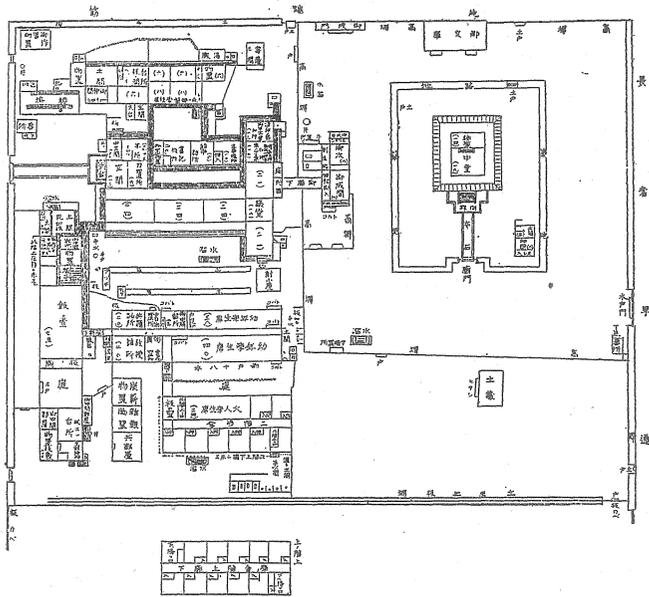
第一期 寛永九年江戸忍岡聖堂より寛文三年弘文館と改むまで。

江戸時代初期にあつて儒學の隆盛と共に孔子を祠る廟、即ち聖堂が建築せられたのは尾張藩に初まる。藩祖義直は好學の君で名古屋城内に孔子堂(四一)を建て、寛永九年には林羅山のため忍岡に聖廟(四二)を建築し幕府昌平校の起



(略節節禎世口樋)館老養國岩 圖三十五第

載所「史育教民庶本日」謙川石



(載所史市屋古名) 圖堂倫明張屋 圖四十五第

原を作つた。然し當時未だ學校としての規模をなはず、少くもその目的は單に孔子を祠るといふ主旨で學校建築の施設としての聖堂ではなかつた。従つてその建築も華麗な支那風様式を多分に採り入れたものであつたことが考へられる。

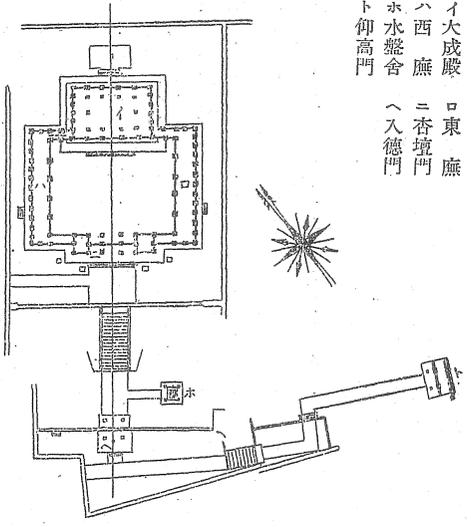
第二期 寛文三年弘文館より元祿三年湯島に移すまで。

寛文三年忍岡の書院が弘文館と稱せられ初めて學校建築の施設としての聖堂が建築されるやうになり、以後江戸全期を通じて各官學校藩學校の設立と同時に聖堂の建築が興つた。この時代の聖堂建築には閉谷學校聖堂が現存する。規模も講堂に比して至つて小さく講造手法も簡素で僅かに床を四半瓦敷となした外、何等支那式手法の混入も見ず當代の様式より一步も出て居ない。これは既に孔子を祠る爲でなく建築の主旨が教育上の中心を形造る意志に依つたものと認むべきで、かの岡山藩學校の聖堂建築の計畫されなかつた點よりも、建築的主力は他の講堂學舎に注がれて聖堂建築にその主力の向けられなかつた結果に外ならない。従つてこの時代の聖堂建築は何等建築史上様式的に特筆されるべきでない。

第三期 元祿三年湯島聖堂より寛政十二年聖堂再興まで。

この時代のものに多久學校聖廟、長崎明倫堂聖堂、閉谷學校校門が現存する。何れも最も支那式異調を帯びしめる如く務め

イ大成殿   ロ東 廡  
ハ西 廡   ニ杏壇門  
ホ水盤舎   ヘ入徳門  
ト仰高門



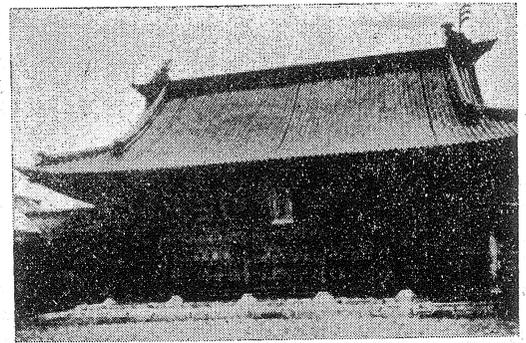
(前災震正大) 圖面平堂聖島湯 圖五十五第

所謂儒教建築としての特異性を發揮した時代である。その要因は實に湯島聖堂の建築にあつて、それは將軍綱吉の華麗を好んだ結果に外ならない。綱吉は元祿三年忍岡の聖廟の規模の小さなを憂ひ神田湯島の地に移し大規模な學校建築を興し、従来の弘文館を改めて單に聖堂と稱した。これは綱吉自身では學校よりも寧ろ孔子を祠ることを主として考へて居つた證左(前)で湯島聖堂の建築が細部に於て華麗な異色を帯びたものであつたら、各地藩學校の聖堂に影響するに至つた。

江戸時代の學校建築に就て

後再三火災に遇ひ再興にあつては幕府財政の困難に伴ひ、

聖堂建築の見るべきものなかつたが、寛政十二年の再興(第五十五、五十六圖)は松平定信老中の後であり、幕府財政の餘裕(前)も生ずるに至り、殊に異學の禁の直後で幕府が如何にこの聖堂建築に力を盡したか窺はれる。従つて從來にない壯麗且つ大規模なものとなし明人朱舜水(前)の作つた聖堂の模型並びに寶永四年刊行の舜水朱子談綺聖堂圖を參考とし殿宇の配置は支那文廟の制度を參酌した。かくこの約百年間は何れも聖堂建築として所謂儒教建築を現出させたのであるが、何れも我が國工匠の手になれるもので、大成殿前廊の屋根裏に輪垂木を用ひ、大棟の兩端に崖吻を上げ下棟の端



(前災震正大) 殿成大堂聖島湯 圖六十五第

に鬼板の代りに虎形を作り柱礎石の形式に一種の異調を帯びる外、未だ支那様式の模倣を完全に行つたものでない。かく寛政再興のその極點に達したのも細部を除き構造手法の根本は全く我が國從來の手法であつたのであるから、<sup>（一）</sup>他の元祿再興のもの及び地方の聖堂に於ては我が工匠が未知の支那建築の細部を表現せんがため如何に努力せしかを察知することが出来る。

第四期 寛政十二年湯島聖堂再興より幕末に至るまで。

この期のものには弘道館養賢堂明倫館及び學校としてはないが、足利學校聖廟（第五十七圖）がある。湯島聖堂の寛政再興の後ではあるが何れも江戸末期の純然たる手法で、殊に秋明倫館尾張明倫堂の如く疊敷高床のものもあり、只棟飾の如き細部にのみ何等かの異風の趣を留て居るに過ぎない。又その規模も小で技術も拙劣最早儒教建築として特筆すべき様式上の特點も持たない。これは既に當代にあつては儒學の力衰へ代るに國學洋學の勃興となり、聖堂の學校施設としての



第五十七圖 足利學校聖廟

意義やうやく薄らぎ殊に諸藩財政の困窮甚だしく、聖堂建築が藩學校に於て形式的のものとなつた爲で、かくして幕末には學校建築が益々その數を増したが、これ等にはかくの如き聖堂建築は既に建築されなくなつた。

江戸時代に於ける學校建築の一施設として聖堂建築を考察するとき、所謂支那式異色を帯びた儒教建築の存在が認められるのは元祿より寛政までの間に過ぎなく、他の聖堂建築は様式的に特異の存在では無かつたことが知り得られる。

### 第五章 結語

江戸時代は概して久しい泰平の時代であつたが、封建制の完備より崩壊に至るまで決して一様一律のものでなかつた。幕府の基礎定まるに従ひ次第に武家存続の意義やうやく薄れ、交通經濟の發達は町人の勃興となり、其處には絶えず現代に向つての必然的な社會狀勢の推移が行はれて居つた。建築史上の江戸時代も實にこの點より再び検討されねばならない。

註 (一九) 城戸久「史蹟崇廣堂」建築と社會一三輯一二號八五一頁、(昭和五年十二月)。

かゝる江戸時代國民文化興隆に直接偉大な力のあつた藩學郷學校の建築に於て、その發展の跡を顧れば四時代を劃して時代の推移と共に藩士の教化から庶民にまで進展し、後期に至るに従ひ數的にも質的にも發達し學校建築として全く完備せるものを見るに到つた。然しこれ等各種の建築は構造手法共に簡素で美術的には何等採り擧げるべき點はない。これは學校建設の主旨の變革と當時諸侯の經濟的狀態の必然的歸結であつて、寧ろ時代の對稱としての建築の變遷を茲に如實に見ることが出来る。又封建社會にあつてかくの如き特殊目的を持つた公共建築が大規模に興されたことは、江戸建築史上最も顯著な一特性として敘上の意味で價值づけらるべきであると思ふ。

なほ本論文に於ては主として江戸時代に於ける學校建築の特殊性とその起因の究明に力を盡し、建築の技術的方面に就ては論述を簡潔にした。これ建築の變遷は社會狀勢の變移に直接間接影響された結果であるにかゝらず、建築の變遷を取扱ふべき建築史論述の立場にやゝともすればゆるがせになり勝ちであることを顧みて、少くも江戸時代學校建築の上に如實にこの事實の現はれを見得る點よりこれを強調したに外ならない。論述の到らざる點少くなしとせないが江戸時代建築史再認識の糧として學校建築の輪廓を少しも明かにし得たならば幸である。

江戸時代の學校建築に就て

- (三〇) 文政二年藤堂高兌の學校建造に對する論述（「前略」年來文武場取立一統に爲政執行度候得共、其入用も不輕候へば勝手方不如意にて家中分掛も存分には用捨難出來候事故存候斗にて空年月を送候所、改革以來手元金も過半減少申付候上猶又嚴敷身をつめ質素を相守り候に付十年來の餘金文武場の營出來候程に相成候に付此度文武場取立伊州に於ても文場申付候（後略）
- (三一) 藤堂高兌公傳略（「前略」大成殿は校の中央に在り、文政三年十月經始し、四年十月落成せり。主として尾陽聖堂の制を稽考し、節して之を半にし、その輪奐の美に擬せず、庀らすに土牆を以てす。仰高門その正面に位し、門より廟に至る間に角道を設け、廟を中分して前後二室とし、俗に稱して前室を中堂といひ、後室を内陣と云ふ。（後略）
- (三二) 水戸市要、及藤田東湖常陸藩、弘道館建設の由來。
- (三三) 高約十尺、幅約六尺、厚十尺八の紀文を書した寒水石の碑である。
- (三四) 水戸弘道館の建築は總て棟大きく輪造が大まかで見奇異の感があるが、この町の商家より考へれば此の地の郷土色の一つであるやうに思ふ。
- (三五) 閑谷讀本、武元君立「閑谷學校圖卷記」。
- (三六) 岡山藩學校講堂は聖堂を兼ねた建築とも見ることが出来る、聖堂建築の入口を左右に分けたのは他に現存足利學校聖廟（第五十七圖）がある。閑谷中學校白木豐氏の説に依ると閑谷學

校は下野足利學校を參考にしたとのことであるから、かゝる手法は釋菜の儀式上必要であつたのかも知れない。

(三七) 閑谷學校史に依ると元祿十三年池田綱政より學田學校林が下附せられ、學校の獨立經濟確立され、翌十四年講堂その他規模が整つたとのことであるからこの門も當時のものと考えられる。

(三八) 建築雜誌、四七輯五六八號四八一頁、(昭和八年三月)昭和八年一月國寶建造物に指定された。

(三九) 岡山藩學校「家中宗子八歳より二十歳の閑入學翌次第たるべし。但二十歳以上の者竝に庶子庶人たりとも品に寄り可令入學事」

閑谷學校課目規則「民間の子弟入學致度者は其願書家本名列村役人與書にて見届教授當にて差出させ云々」

崇廣堂石川謙「日本庶民教育史」一九五頁、現に津藩に於ける藩費有造館の教則を見るに(中略)寺小屋での教育と、その教則目を同じうして居ると主張したい位である。平民の藩費で學んだことはかくして否認し得ない事實である。

(四〇) 尾張志「御府内學校のはじめは源敬公の儒者深田正室を東よりめて月俸月十八分を賜り大津丁の西側の地を學問所となさしめ給へり」。

(四一) 本庄榮治郎「近世封建社會の研究」改造社版三三頁。

(四二) 聖堂は處に依り聖廟、文廟、大成殿、先聖殿とも云はれて居る。

(四三) 西村天囚「尾張敬公」城内孔子堂は八角圓堂で相當異色の

あつたものらしく、後享保九年法藏寺に移されたと傳はるが、その建物は先年焼失した。

(四四) 西村天囚「尾張敬公」五六頁、羅山が文に依れば「輪奐翼飛不日にして成る。其の制は他と異り尋常宮室の例の如くに非ず。我が朝は昔その名あるを聞くと雖も如是の形模は未だ之あらず」と記して居る。

(四五) 高橋俊乘「日本教育文化史」三九九頁。

(四六) 本庄榮治郎「近世封建社會の研究」改造社版二六頁、財政状態は多少刷新せられ寛政元年より十年に至る間に府庫の剩餘金三三八、〇〇〇兩に上つたといふ。

(四七) 朱舜水は浙江餘姚の人で明の滅亡後萬治二年來朝し、徳川光圀に聘せられ、學宮圖説を著した。

(四八) 關野貞「東京市の古社寺」建築雜誌二五輯二九二號二三二頁。(明治四十四年四月)。

同氏「日本建築に及ぼせる大陸建築の影響」岩波講座日本歴史第十二回。

大熊喜邦「近世武家時代の建築」岩波講座日本歴史第十六回。

# 昭和十年度文部省視學委員復命書抄 (三)

## 英語

視察縣名 鹿兒島縣  
視察年月日 自昭和十年十月十八日至十月二十四日

文部省視學委員福岡高等學校教授 大内覺之助

中等學校に於ける外國語教授の要旨、教授分科等の中(高等女、師範、實業)學校令施行規則に明示されてゐる所であるが、其の範圍内に於て時と處とに隨ひ適宜に運用すべきは言を俟たないであらう。

近年我國の進展に伴ひ外國語教授の目的が再吟味、再検討され外國語(英語)教授が我國文化の向上に對して有つ役割に就て一般英語教員が如何なる信念を以て教授に當るかは重大なる問題となつて來た。凡そ信念なき所に教育はあり得ないのであつて「何が故に教ふるかに就ての確乎たる信念の把握」が第一で「如何に教ふるかの方法」は第二になるべき問題でなければならぬ。本委員の視る所に依れば前者に對する關心が喚起されつつあるは慶ぶべき現象なるに不拘依然として後者の研究にのみ偏する傾向が認められる様に思へたのでこれに對し一二の所見

を述べておいた。

1 現今我政府殊に文部省は國體の明徴に努力を致してゐるのであるが、教職に在る者この意を體し、最善を盡すべきは當然の義務である。殊に國體明徴の一手段として、外國との比較が最も有效である事は文部省も明示してゐるところであつて、之には英語教員は最適任者と言へるであらう。

2 近年我國に於ては年約一百万人の人口が増加しつつあるにも不拘海外に移住する者は僅に年約二萬餘に止まる。乃ちこの人口問題の解決は我國策中最も重大なるものであらう。この時に當り、世界意識ともいふべきものを生徒に與へ、大いに海外に發展すべき進取の氣象を養成するに最適なりと信ぜらるゝ英語教授は男子のみならず、女子中等學校に於ても重要な一學科たるを失はないであらう。

